

コトワザあらかると



灰吹きから大蛇



育蛇に怖じず



蛇の道は蛇



育蛇に怖じず



藪をつついて蛇を出す



灰吹きから大蛇



蛇はすにして人を呑む

2025 年 11 月 20 日

干支のことわざ —蛇—

<表紙絵の解説>

1. 灰吹きから大蛇 途方もない事やあり得ない事の譬え。灰吹きはタバコの吸い殻を捨てるための筒で多くは竹製。突如、大蛇が灰吹きから飛び出したので酒宴に興じていた人たちはびっくり仰天。人間はひっくり返り、膳は倒れ、空中に放り出された徳利から酒が降り注ぐありさま。幕末頃の河鍋暁斎による小型浮世絵「狂斎百図」の一枚。
2. 盲蛇に怖じず ものの怖ろしさを知らぬ者は無鉄砲なことをすること。また、無知な者はものおじしないこと。有名な浮世絵師・歌川国芳による錦絵。盲人たちが丸木の一本橋を連なって渡るのを岸辺で酒宴中の蛇どもが笑いものにしている戯画だ。
3. 蛇の道は蛇 同類の者のことは同じ仲間にはよく分るとの譬え。これは賭博用のカルタで「道才かるた」とよばれる。絵札と字札に番号がつけられており各 62 番まである。字札に特徴がある。「しやの道ハ」とだけ上の語句のみ記されて、下は省略されている。
4. 藪をつついて蛇を出す 余計なことをして自ら災いを招く譬え。明治後期の「い」「ろ」の 2 枚が 2 種類ある珍しいカルタの一種。上方系・江戸系に属さない新案系のもの。
5. 蛇は寸にして人を呑む ^{ジャ}優れた者は幼少の頃より抜きでた素質を持つとの譬え。戦前の朝鮮で発行されたカルタ。子どもを小さなヘビが呑もうと追いかける図柄だ。
6. 灰吹きから大蛇 有名な葛飾北斎『北斎漫画』第 12 編にあり、しかも見開き 2 ページに渡るもので、同漫画では最大級のサイズだ。構図は 1.の河鍋暁斎によく似ている。
7. 盲蛇に怖じず 大正時代ころのカルタの一種。江戸系と上方系に新案のものがまじる混交形のもの。絵札にことわざの文字が書かれており、これは百人一首と同じ形式だ。

<蛇に関することわざ>

日本には 150 前後あるので、ここでは実際に使われたものから厳選して紹介したい。

- ◇^{トウロウ}蝮螂手を挙げて毒蛇を招く：身の程をわきまえない無謀な試みの譬え。カマキリが斧を振り上げて毒ヘビにおいでおいですることだ。軍記物『源平盛衰記』（呂巻第二）で使われている他にない珍しいことわざ。類句はよく知られる「蝮螂が斧」。
- ◇草を打って蛇を驚かす：ふとした事で意外な結果を招く譬え。また、ある人を懲らしめることによって関係する他の人の戒めとすること。後の意味のものは見せしめ行為のことで、現代もままだに見聞きするが、ことわざの例は珍しい。由来は中国の古典と古く、日本でも鎌倉時代の道元『王索仙陀婆』にあるが、その後はあまり使われていない。
- ◇蛇の道は蛇：ヘビことわざでは古い部類のひとつ。日蓮上人の『観心本尊抄』に「蛇は自ら蛇を識る」との言い回しがある。室町時代の『鴉鷺物語』には「蛇の道をば小さけれ共蛇が知る」^{クチナワ}とでてくる。見出しの言い回しは江戸時代になってからとなる。
- ◇藪をつついて蛇を出す：早い例の一つが 1810 年の歌舞伎『心謎解色糸』に「藪を突いたら蛇が出ようが、～」とでてくる。また、「藪を叩いて蛇を出す」ともいう。どちらも鶴屋南北の作品にある。江戸後期からみられるようになり、この他、人情本など 3 点にある。明治期から盛んに使われ出し、それが戦後も上昇しながら続く。戦後の使用数が第 1 位のもの。これと対照的なのが「盲蛇に怖じず」で戦前昭和期までは盛んだった。

(時田昌瑞)

コトワザあらかると9号

目 次

干支のことわざー 蛇 ー <表紙絵の解説>	(02)
目 次	(03)
「巳年がしん」に思うー コトワザの新たな方向性 ー	三木 恒治 (05)
『貧しいリチャードの暦』こぼれことわざ	林 幸子 (12)
目には青葉 山郭公 はつ松魚	渡辺 慎介 (19)
私家版 卓球カルタ	山口 政信 (26)
月日は百代の過客 私の「奥の細道」。歩き旅	蟻川 剛 (33)
屁玉と金玉ーユニークな類諺とことわざの移ろいの様相ー	時田 昌瑞 (40)
「振り出しに戻る…再挑戦」 …大阪マラソンチャリティーランナー記	清水 泰生 (47)
口裂け女とレインボーマン	横田 詞輝 (51)
「じゃ」か「へび」か?	藤城 孝輔 (53)
<人の振り見て我が振り直す>とライトの点灯	小森 英明 (55)
執筆者紹介	(57)

「巳年がしん」に思う—コトワザの新たな方向性—

三木 恒治

はじめに

先日、テレビで『美の壺・江戸のおしゃれ』（NHK・BS 放送）を見ていたら、蛇が体を寄せ合っている刺繍が施された「合切袋」が登場した。合切袋とは、火事などの時に身の回りの貴重品を入れて逃げるために使った袋のことであり、『一切合切』という四字熟語はここから派生したと言われる。

今年（2025 年）は巳年である。「巳」は胎児の曲がった姿かたちに由来しているらしい。もちろん「巳」は「蛇」を指しているが、「蛇が身を寄せ合う」は「実（巳）を結ぶ」に通じ、洒落好きで縁起を担ぐ江戸っ子にとって人気のデザインだったのも無理はない。

巳年生まれの戦国大名には毛利元就（1497 年生まれ）、武田信玄（1521 年生まれ）、島津義久（1933 年生まれ）らがいる。いずれも勇猛果敢な武将というより、謀略家、知将といったイメージである。毛利元就は巧みな離間工作によって中国地方の大大名である大内家や尼子家を内側から切り崩し、滅亡に追いやった。武田信玄も実戦より調略によって領土を拡張し、自分の野望のためには同盟相手も平気で裏切り、信義を重んじる嫡男を死に追いやった。島津義弘は朝鮮の役や関ヶ原の敵前中央突破で名を馳せた猛将であるが、兄の義久は強かな二枚舌外交によって関ヶ原の戦後処理に手を尽くし、島津家の命脈を保つことに成功した。弟の義弘が島津家の表の顔なら、彼は裏で糸を操るフィクサーであった。毛利元就や武田信玄に比べて島津義久は影が薄いですが、彼の功績がなければ薩長主導の幕末維新もなく、日本の歴史は変わっていたかもしれない。因みに「マムシの道三」の異名をとっている斎藤道三は、生年は定かではないが 1494 年が有力視されており、残念ながら巳年生まれではない。著名な野球選手に目を向けると、三冠王を三度獲得した唯一の選手であり、中日の監督として優勝経験もある落合博満（1953 年生まれ）がいる。彼は間違いなく超一流の選手・監督であるが、戦国大名のケースと同じように策士タイプで、勝利のためには非情の手段も辞さない戦略が賛否の議論を呼んだこともあった。

野球と言えば巳年の 1965 年は川上巨人の V9 幕開けの年である。（もっともアンチ巨人の私にとっては少年ながら悪夢の始まりであったが。）私の地元・岡山の高校野球史にとって 1965 年は、好投手平松政次を擁して岡山東商が選抜大会で優勝した記念すべき年だ。後にも先にも岡山県勢が甲子園大会で優勝したのは、この 1 回のみである。

1. 日本の「蛇」ことわざ

前置きはそのくらいにして、まず日本語で蛇を使ったことわざを以下列挙しておこう。

- ・鬼が出るか蛇が出るか。 どんな恐ろしいことが待ち受けているのかわからないという不安な気持ち。物事の見通しがつかないこと。
- ・鬼が住むか蛇が住むか。 世の中や人の心には恐ろしいものがたくさん潜んでいること。
- ・女の情に蛇が住む。 女性が執念深いこと。
- ・蛇の道は蛇。 その道に精通しているものは、同類の行動が手に取るようにわかること。
- ・蛇が蚊を飲んだよう。 少なすぎて腹の足しにもならないこと。「蛇」と「蚊」は、字体

- がよく似ているのと存在感の対照性で、一対の組み合わせでよく使用されているようだ。
- ・蛇に噛まれて朽ち縄に怖じる。 一度ひどい目に遭ったため、不必要に用心深くなること。「羹に懲りて膾を吹く」と同義。
 - ・蛇稽古。 春に習い事をはじめ、秋に蛇が穴にこもる頃やめてしまうこと。長続きしないことの喩え。
 - ・蛇が蛙を飲み込んだよう。 細長いものの途中がふっくりと膨らんだ形状を指す。かつて幻の爬虫類「ツチノコ」は、蛙を飲み込んだ蛇の姿ではないかとの説もあった。
 - ・蛇に見込まれた蛙。 強い者に弱い者が眼を付けられ勢いを削がれること。「蛇ににらまれた蛙」ともいう。「蚊」と同様、「蛙」も「蛇」と一対で使われることが多いようだ。
 - ・蛇の足より人の足。 自分の足元をしっかりと見直すこと。役に立たないことより、身近なことについて考える方が大切ということ。
 - ・蛇の生殺し。 生かしも殺しもせず、半殺しの状態にしておくこと。
 - ・蛇が出そうで蚊も出ない。 大事が出来しそうな気配だが、実際には何事も起こらないこと。「大山鳴動して鼠一匹」とほぼ同義。
 - ・蛇は竹の筒に入れてもまっすぐにはならぬ。 性根の曲がっているものは、いくら矯正しようとしても良くはならないこと。
 - ・盃中の蛇影。 物事を疑ってかかると、何でもないことが恐ろしく思われること。古代中国晋の故事で、壁にかけている弓の影が盃の中に映ったのを蛇と勘違いして怖がったことに因む。
 - ・灰吹きから蛇が出る。 意外なところから意外なものが出る、特に小事から大事が生じること。道理上あり得ないこと。
 - ・蛇を画きて足を添う。 余計なことをすること。古代中国楚の国で、絵を描くことの速さで一番だったものが、時間があるので足を描き添えている間に他の者が足のない正しい姿の蛇を描き終えて賞の盃を奪い取ったという故事に因む。「蛇足」ともいう。
 - ・生殺しの蛇に噛まれる。 物事の詰めが甘くて(勝負事では相手のとどめを刺し損ねて)、それが命取りになること。「死に馬に蹴られる」と同義。
 - ・蛇を半殺しにすると祟りがある。 詰めの甘さと動物を残酷に扱うことを戒めている。
 - ・めくら蛇に怖じず。 物事の恐ろしさを知らない者は大胆に振る舞えること。
 - ・藪をつついて蛇を出す。 しなくてもよい余計なことをしたばかりに、とんでもない災難に合うこと。「藪蛇」ともいう。
 - ・草を打って蛇を驚かす。 何気ない行為が意外な結果を導くこと。
 - ・藪に蛇無かれ村に事無かれ。 何事も平穏無事が一番だということ。
 - ・長蛇を逸す。 絶好の機会を逃すこと。
 - ・蛇の夢は人に話すな。 蛇の夢は縁起が良いが、人に話すと悪いことが起きる。夢は人に話すものではないという戒め。
 - ・蛇は寸にして人を呑む。 優れた人物は幼いころから非凡なこと。「梅檀は双葉より芳し」と同義。
 - ・くちやめ(マムシ)は万病に効く。 マムシは滋養強壮、疲労回復の効能があり、傷や化膿止めにも良いとされている。
 - ・竜頭蛇尾。 はじめは勢いが良くて、最後は尻すぼみになること。

ざっと蛇に関することわざを列挙してみたが、大半は人間にとって恐ろしいものの象徴として使われていることがわかる。その他のケースでも「執念深さ」「心根がひねくれていること」「取るに足らぬ有様」といったネガティブな意味で使われており、昨年扱った「竜」のようにポジティブなものはほとんど見られない。「竜頭蛇尾」は、まさに勢いをもたらす竜と好対照の事例である。それでも十二支に名を連ねているだけあって、縁起物としての一面も見受けられる。脱皮を繰り返すことから「復活と再生、増殖性」の象徴とされており、蛇の抜け殻を財布に入れておくと金がたまるとも言われている。「巳」を「実」にかけて、巳年は実を結ぶ年、長年の苦労が報われ成功が見込まれる年と考えられてもいる。また、「巳」は「身」にも通じ、「身を切る」ことを避けるために、多くの地域では巳の日には着物の生地を裁断する作業はしないようにしていたらしい。仏教では守護神ともされ、白蛇は弁天様の使い、蓄財の神として重宝されている。ただ、総体的には前年の干支である竜と比べて見劣りする印象は拭い難い。

2, 外国の「蛇」ことわざ

次に外国の「蛇」ことわざを概観してみよう。

- ・凶悪な虎も身中の蛇には手を焼く。(中国) 獅子身中の虫。
- ・虎は死んでも立派な皮が残るし、蛇は死んでもしっぽだけが残る。(中国・ミャオ族)
蛇のしっぽには、死んでも死にきれない者の執念が宿ること。
- ・蛇も死なず。棒も折れず。(ビルマ) 相手をとことん追い詰めることは避け、自分も傷つかずに事態を収拾すること。
- ・クサリヘビを懷に抱える。(ビルマ) 「獅子身中の虫」と同義。
- ・蛇を殺してカラスに食わせる。(タイ) 「漁夫の利」と同義。
- ・蛇使いが蛇のために死ぬ。(タイ) 自分の得意なことのために破滅すること。
- ・蛇を投げても首にからみつく。(タイ) 解決しようと努力してもうまくいかないこと。
- ・鶏には蛇の足が見え、蛇には鶏の乳房が見える。(タイ) 相手の弱点や秘密を知り尽くしている敵同士のこと。人に隠しているはずが、きちんと見られていること。
- ・蛇のいない森はない。(フィリピン) どこにでも扱いにくい厄介な人間がいること。
- ・蛇の口に手を入れるな。(フィリピン) 君子危うきに近寄らず。分別、慎重の重要性。
- ・枝分かれした蛇の舌のよう。(ベラウ) 二枚舌を使うこと。
- ・蛇のマダラは外に、人のマダラは内に。(モンゴル) 蛇のマダラは外にあって誰にも危険は明らかだが、人の愚かしさは内に隠れていて、外見だけではわからないこと。
- ・蛇は三つに切断されてもトカゲと同じくらい長い。(モンゴル) 立派な人はたとえダメになっても、その人が得た威信ははっきりと現れること。「腐っても鯛」と同義。
- ・蛇を袖から入れてはならぬ。(アフガニスタン) 優しそうに見えても本性は変えられないこと。「三つ子の魂百まで」と同義。
- ・蛇に噛まれたものは縄に驚く。(アフガニスタン) 「糞に懲りて膾を吹く」と同義。
「蛇に噛まれたものは縄におびえる。」(パキスタン)「蛇に噛まれたものは白黒の縄を恐れる。」(イラン) も同じ。
- ・寝ている蛇の尾を踏むな。(カザフスタン、ウズベキスタン) わざわざ危険なことを

するなということ。

- ・蛇から蛇が生まれ、サソリからサソリが生まれる。(タジキスタン) 元のものからかけ離れたものはできないこと。「瓜の蔓に茄子はならぬ」と同義
- ・寒さにへばった蛇は最初にあっためてくれた人を咬む。(アルメニア) 恩を仇で返すこと。「飼い犬に手を噛まれる」と同義。
- ・白も黒も蛇は蛇。(アルメニア) どっちもどっち。「五十歩百歩」と同義。
- ・蛇は脱皮しても心は蛇のまま。(ジョージア) 見た目は変化しても、本質は変わらないこと。「三つ子の魂百まで」と同義。
- ・蛇は脱皮をするが、齒は捨てない。(ラトヴィア) 人の本性は変わるものではないこと。「雀百まで踊り忘れず」と同義。
- ・蛇のように賢く、蜜蜂のように勤勉で、キジバトのように可愛くあれ。(ルーマニア) 人間の理想的な姿を身近な生き物に喩えている。蛇は賢者の象徴とされている。
- ・蛇は足のことを口にしない。(マケドニア) ずるがしこい人間は、自分の弱みを決して見せようとししないこと。ここでは邪悪な者の象徴とされている。
- ・蛇に噛まれたことのある人は蚯蚓をも恐れる。(セルビア) 「糞に懲りて膾を吹く」と同義。「蚯蚓」の代わりに「蜥蜴」が使われることもある。
- ・蛇を殺すならその頭を打たなければならない。(クロアチア) 悪は徹底的にその根源を断たなければならないこと。
- ・罪のない花と見せかけて、蛇の舌心をひそめよ。(マクベスの一節) 悪行に手を染めることに躊躇するマクベスを励ます夫人のセリフ。
- ・長いものは蛇になる。(イタリア) 議論などが長引いて本筋から外れてゆくこと。
- ・蛇の子は毒蛇。(エチオピア) 親よりも子供の方が、さらにたちが悪いこと。
- ・蛇のことを口にすると、杖を手に握りしめよ。(スワヒリ) 一歩先を読んでから行動を起こすべきだということ。
- ・蛙も蛙の腸も蛇のものだ。(ブルキナファソ) 蛙(善良で無力な市民)は、すべて蛇(王、強者)の意のままだということ。
- ・振る舞いは蛇に変わり、その主に向き直って咬みつくことがある。(セネガル) 自分のした愚かな行為の報いは自分に返ってくるとのこと。「身から出た錆」と同義。
- ・蛇を捕らえる者はサソリを相手にしない。(セネガル) 大物を狙うものは小物を相手にしないこと。また、強いものを味方に付けたら、それより弱いものを恐れないこと。
- ・蛇に足を付ける。(中米) 大げさなこと。「話に尾ヒレ背ヒレを付ける」と同義。
- ・蛇がお前を咬むと、お前はトカゲからさえ逃げ出す。(ジャマイカ) 「糞に懲りて膾を吹く」と同義。
- ・黒い蛇を打つ杖は黄色い蛇をも打つ。(ジャマイカ) 人の性質は、相手によって変わるものではないこと。「羊を打つ杖は山羊をも打つ」とも言う。
- ・もしお前が蛙を食いたくないなら、蛇と一緒に遊べない。(ジャマイカ) ある人と友達になれば、悪事でも行動を共にしなければならないこと。
- ・蛇が無事に成長したいなら、自分の穴でじっとしてなければならない。(ジャマイカ) 外に出れば多くの敵がいること。
- ・私は蛇に噛まれたので、虫を見ても恐ろしい。(スリナム) 「糞に懲りて膾を吹く」

と同義。

- ・ブッシュが燃えれば、蛇には會長はいない。(スリナム) 家族が壊れたら何の権威も存在しなくなる事。
- ・蛇は自分の湾曲を知らないで、ラクダの体が曲がっていると言う。(古ウイグル) 自分の非難されるべきことを棚に上げて他人を非難すること。「目糞鼻糞を笑う」と同義。
- ・蛇は宝石で飾られていても恐ろしい。(インド古典) 悪人が学問などで飾られていても、これを避けるべきであるということ。
- ・蛇は自分の毒に正気を失って自らを咬む。(インド古典) 悪しき知識を持つものは、理性を失って自分自身を害すること。
- ・蛇は頭上に、医者是他国に。(インド古典) 危険が迫っているのにそれを取り除くべき手段が手元にないこと。
- ・牙のない蛇、富のない人。(インド古典) 無駄で役に立たないものの喩え。
- ・蛙の油を眼に塗った人は、竹を蛇と見誤る。(インド古典) 蛇は蛙にとっては天敵であること。
- ・蛇に噛まれたものは、綱を引くのも恐がる。(アラブ古典) 苛酷な経験をした者は類似した状況に置かれると必要以上に神経質な反応を見せること。
- ・蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。(新約、マタイ福音書) イエスの言葉とされているが、蛇は賢者の象徴となっている。

蛇の生息に適している熱帯、亜熱帯地方が当然のことながら圧倒的多数を占める。そして蛇が生活の脅威になっている地域では身近な存在として蛇を捉え、コトワザの描写がかなり具体的であることがわかる。「蛇を投げても首にからみつく」「蛇使いが蛇のために死ぬ」などは、恰も実体験から生まれた教訓のように現実味を帯びている。逆にヨーロッパの地域では「蛇のように賢く」「長いものは蛇になる」など、観念的、比喩的なレベルのものが多し。いずれにしても、賢いものの象徴以外にポジティブな用例はなく、蛇は人間にとって忌み嫌うべき存在と見なされていることがわかる。西洋でも、旧約聖書では蛇はアダムを誘惑する邪悪な存在であるし、他の物語や神話でもしばしば悪魔の代名詞として登場する。ただし賢者の象徴という点は他地域と同じで、アクロポリスの丘のアテネ神殿には守護神として蛇が祀られている。また病気を癒す神アスクレピオスの杖には蛇が巻き付けられ、生命の守護神ともなっている。年ごとに脱皮を繰り返す蛇は若返り、健康の象徴でもあるのだ。まさに「毒をもって毒を制す」ということであろうか。

参考までに、ドイツ語の言い回しで「Schlange」(蛇、schlingen「絡みつく」という動詞から派生している) がどのように使われているのか概観してみよう。eine Schlange am Busen nähren, (獅子身中の虫を養う) der Schlange auf den Schwanz stehen, (蛇の尾を踏む) falsch wie eine Schlange, (蛇のように不誠実) Da beißt sich die Schlange in den Schwanz. (蛇が自らの尾を咬む、堂々巡り) Die Schlange sticht nicht ungereizt. (蛇は刺激しないと咬まない、触らぬ神に祟りなし) Schlangenfresser (蛇の餌、粗末な食事) などが挙げられ、ここでも総じて蛇は嫌われ者であることがわかる。ただし、sich wie eine Schlange winden, (何とかして苦境から逃れようとする) のように、忍耐強い性格が付与される場合もある。また、Seid klug wie Schlangen und ohne Falsch wie die Tauben.

（蛇のように敏く、鳩のように素直なれ）というふうに知恵の代名詞ともなっている。

3. 「巳年がしん」

ここで巳年の歴史を振り返ってみよう。古代に遡ると 645 年は大化の改新（現在では「乙巳の変」と呼ばれている）の年である。この変を機に日本は有力豪族の合議制から天皇中心の中央集権国家へと生まれ変わった。中世では、1185 年に実質的に鎌倉幕府が成立し、武士が権力を掌握したとされる。（鎌倉時代は源頼朝が征夷大將軍に就任した 1192 年が始まりとされてきたが、平家が滅亡し源氏が武家のトップに立ち、諸国に守護・地頭を設置し箱ものの体裁を整えた 1185 年とする見解が現在では有力である。つまり、年表の覚え方が「イイクニ造ろう」ではなく、「イイハコ造ろう」に代わったのである。）1221 年は承久の変が起り、敗れた朝廷は北面の武士など自前の武力を失い、名実ともに武家が政権を手中に収めた年である。後の建武の中興で一時的に朝廷が政権を奪取するが、これは鎌倉有力御家人をはじめとした武家勢力の後ろ盾があったため、承久の変以後明治維新までの 650 年間、朝廷自体が実戦的な武力を保持することはなかった。近代に目を向けると 1905 年は日露戦争が終結した年である。これを機に日本が欧米列強の仲間入りを果たしたことは間違いない。引き続き 1917 年にはロシア革命が起り、ロシアは皇帝の専制国家から世界初の社会主義体制であるソ連に生まれ変わった。1929 年には世界恐慌が勃発し、それが第二次大戦への導火線となった。1941 年は日本が太平洋戦争に突入した年、1989 年は昭和が平成に代わりベルリンの壁崩壊などで世界の対立の構図が東西のイデオロギーから、南北の宗教・民族へと転換した年とされている。以上概観したように、巳年は変事が勃発する年というのは歴史が証明している事実でもある。しかも、政局や世界情勢の転換をもたらす画期的な史実が多いことが目を引く。今年も終盤に差し掛かっているが、ウクライナ紛争は出口が見えず、中東の覇権争いも目が離せない。台湾有事も可能性を否定できない。日本も 7 月の参議院選挙で自民党の衆参過半数割れが決定し、政局も混迷を極めていく。

私の地元の岡山県の北部には「巳年がしん」という言い伝えがある。「がしん」とは飢饉のことで、巳年には冷害や干ばつなどで、不作の年が多かったらしい。巳年の 1785 年に天明の大飢饉、1833 年に天保の大飢饉があった。しかし飢饉は何年か続くもので巳年だけが飢饉年というわけでもない。地震や火山の噴火などの天変地異と巳年の関連性について見てみると、1586 年の天正大地震、1596 年の慶長伏見大地震、1707 年の富士山噴火と宝永大地震、1783 年の浅間山噴火、1854 年の安政南海地震、1923 年の関東大震災、1946 年の昭和南海地震、記憶に新しい所では 1995 年の阪神淡路大震災、2011 年の東日本大震災は、いずれも巳年以外の年に発生している。では、自然の災害と巳年が全く無縁かというと、1917 年の高潮騒動（最大風速 40m で東京の低地では 100 人ほどが溺死した）、2013 年の台風による伊豆諸島の土砂崩れは、紛れもなく巳年の変事である。少なくとも台風や洪水との関連は見過ごしが多く、土砂崩れは古くは「蛇崩れ」「蛇落ち」と呼ばれ、洪水が大蛇の出現に喩えられていたことは確かである。飢饉や大災害に限らず、「巳」が時代や社会に変化をもたらすと考えられていたことは上述した通りである。「巳年がしん」の言い伝えの真意は、「有事に備えて準備を怠らないように」という教訓である。実際、お百姓さんたちは飢饉に備えて稗や蕎麦を貯蔵しておき、蕨の根などを餅にして食べたという。しか

し実際には飢饉は人災であり、天変地異による凶作が必ずしも要因ではないと思われる。流通経済による穀物の投機、買い占めなどによる市場操作が飢饉を招いたという見方もある。それが証拠に、古代の飢饉よりも近世以降の方が惨状は深刻だったらしい。藩主をはじめ武士階級で餓死した者は皆無であり、不条理なことに餓死者のほとんどは自分たちが作った穀物を権力階級に搾取され、流通経済とは縁の薄かった農民たちである。いわば、政治の無力と一握りの人間のエゴが飢饉を生み出したともいえるだろう。その煽りを食い、「巳年がしん」を抛り所として生き延びる自助努力を強いられてきたのは、いつの時代も底辺にいて真正直に生きている人たちなのである。

結び

現代のわれわれは、ほとんどの者が地縁、血縁とは切り離され、豊穰な自然との一体感は失われ、学校や職場など利益追求型の組織に子供のころからどっぷりとつかって生活している。しかし災害に遭遇した時、効率重視社会で培ってきた知識や経験は正直ほとんど役に立たない。それどころか成果至上主義や合理的思考は、往々にして横のつながりを阻害する危険につながる。私自身未だに受験生マインドが抜けきらないところがあり、何か目に見える結果が見込めそうにないと二の足を踏んでしまうことが多々ある。そうした状況では「人とつながる」発想は生まれにくい。新たな時代のセーフティーネットを構築するためには、まずは個々人が「利益共同体」から「地域のコミュニティ」へとメンタルチェンジすることが重要なのではないだろうか。といっても、横のつながり、連帯感は一朝一夕に育成されるものではない。年中行事への参加などを通してコミュニティの紐帯を実感する努力を日頃から積み重ねてゆくしかない。その際、学校や組織では学ぶことができない共同体の知恵が凝縮されたコトワザが大きな道標になるのは間違いないだろう。

今年の中国地方は6月に梅雨が明けて、全国的にも猛暑が半端ではない。最高温度が35度を超えても当たり前感覚になってきた。私が子供のころは真夏でも30度を超える日は少なく、盆を過ぎると朝晩は涼しくなり、しのぎやすくなったものだ。それから長い年月が経ち状況が変化したのは言うまでもないが、「地球温暖化」を通り越して「地球沸騰化」の様相すら呈している。雨もほとんど降らず、米価の高騰、備蓄米騒動もあり、「令和の飢饉」が現実味を帯びつつある。いずれにしても何かが起こる予感がする巳年である。とすればむしろそれをチャンスととらえるべきであろう。今こそ先人が生きる縁としてきたコトワザの原点に謙虚に耳を傾け、悪しき日常性バイアスから抜け出す良い機会である。後顧の憂いを完全に断つのは至難の業ではあるが、各々が「巳年がしん」を座右の銘として、どんな些細なことでもできる範囲で何かに取り組むべきではないだろうか。

【主要参考文献】

- ・用例でわかることわざ辞典 2005年 学研辞典編集部 学研
- ・世界ことわざ大辞典 1995年 柴田・谷川・矢川編 大修館書店
- ・岡山のことわざ 1987年 佐藤・竹内・次田・福尾著 日本文教出版社
- ・天災から日本史を読み直す 2014年 磯田道史著 中公新書
- ・飢饉 2000年 菊池勇夫著 集英社新書

『貧しいリチャードの暦』 こぼれことわざ

林 幸子

一昨年から二年間かけて、ベンジャミン・フランクリン作 *Poor Richard's Almanack* (『貧しいリチャードの暦』) のことわざ分析をしてきました。本学会の『ことわざ研究・談話室』をお読みの皆さまにはお馴染みだと思いますが (なんと、5回も連載しました)、一言この暦の紹介をさせていただきます。

日本ではアメリカ独立期の政治家として、風揚げを利用し雷放電の実験をした科学者として、また古典ともなっている『フランクリン自伝』の作者として名高いフランクリンですが、本国で有名になったきっかけを作ったのが『貧しいリチャードの暦』という暦でした。1733年から1758年まで毎年1回発行された暦は24~25頁から成り、その中には、読者への挨拶、惑星の動き、天気情報、道路情報、裁判所の開設日程等々盛り沢山の情報が提供されています。そしてそれと同時に、毎月1頁の「韻文と天気予報」の欄外を埋めるように、ことわざが散りばめられています。

フランクリン自身も「暦の欄外をことわざのようなもので埋めた」と明言している通り、26年間発行され続けた暦には900近いことわざが登場し、『貧しいリチャードの暦』は正にことわざの宝庫です。特に、勤勉と節約の必要性に絞った最終1758年版は、1757年までのことわざからフランクリン自身が選りすぐった100ほどのことわざが再登場し、『富に至る道』と題され、独立した作品として世界各国に紹介され現在も読み継がれています。

しかし残念なことに、それ以外の「読者へのメッセージ」や月ごとの韻文、800に及ぶことわざには、本国アメリカも含めてあまり光が当たっていません。そこで、暦全体を読み返し、ことわざを全て抽出、その出典や意味を英米日の英語諺辞典類で探り、本邦初訳?の日本語訳を加えたものを、「ベンジャミン・フランクリン『貧しいリチャードの暦』のことわざめぐり」として『ことわざ研究・談話室』に掲載させて頂くことになったのです。^(注1)

分析の結果を詳細に示すと、1758年版の再登場92を除いて、26年間で787のことわざが確認でき、その内重複はわずか24で、フランクリンが毎年30以上の多様なことわざを連続して発信していたことが分かりました。さらに書籍やネット上で *Poor Richard* の言葉として伝えられているものの多くが、実はフランクリンが生み出したものではなく、過去の文学作品やことわざ辞典から借用してきたものだということも確認できました。

フランクリンは抜かりない人ですので、自伝で「*Poor Richard's Almanack* のことわざは、多くの国と多くの人の知恵を基にしている」と断っているだけでなく、「私は生まれながらの詩人ではない・・・他の人の素晴らしい言葉があるのに、なぜ自分の良くない文を使う必要があるか」と開き直つてもあります。その言葉通り787のうち 半分以上が借り物でした。(もちろんそれらを巧みに言い換えたリメイク版も数々ありますが)

そこで今回は、借り物ではないもの、つまり英米日の英語諺辞典類で *Poor Richard's Almanack* が初出であると明言されているもの^(注2)、及びどの辞典類にも掲載されていないもの390に的を絞りました。いわばフランクリンの名言から零れ落ちたフランクリン独自のことわざです。その中から私の独断と偏見で面白いものをアラカルトに選び、和訳を付けて紹介します。英文は原文のまま (誤字、斜字体等)、文末に暦掲載年度を加えました。

1. お金や富、時間

“Time is money” はフランクリンのことわざというと必ず取り上げられます。時間が大切だとは言いつつ古されている概念ですが、お金と時間を be 動詞で結んだのはフランクリンが初めてのようです。『若き商人への手紙』(*Advice to a Young Tradesman*, 1748) 中の言葉ですが、*Poor Richard's Almanack* にもお金や富、時間に関することわざが頻出します。

- Time *eateth* all things. (1733)
(時はすべてを食い尽くす)
- Nothing but Money, Is sweeter than Honey. (1735)
(蜜よりまさる金の甘さよ)
- Death takes no bribes. (1742)
(死神に賄賂は通じない)
- Money and Man a mutual Friendship show: Man makes *false* Money, Money makes Man so.
(お金と人は友達同士。人は偽の金を作り、金は偽の人を作る) (1742)
- Time *enough*, always proves *little enough*. (1747)
(時間はたっぷり、実は大慌て)
- Many a Man would have been worse, if his Estate had been better. (1751)
(もしもっと金持ちだったらもっと悪人になっていた)

* be 動詞で結ばれ同等のはずのお金と時間ですが、フランクリンにとってはお金より時間で、どれも “Time is money” よりかなり辛辣です。手元不如意の私は (おそらく善人なので)、死神に賄賂なしで天国に行けますでしょうか？

2. 勤勉・儉約

1758 版の暦『富に至る道』が有名になったために、そこに出てくる勤勉・質素・儉約を推奨する 100 のことわざも非常に有名です。実はそのほとんどが借り物で、1757 年までに登場しているものの再利用、あるいはそれらをリメイクしたものです。

- There are lazy Minds as well as lazy Bodies. (1740)
(怠惰な心は怠惰な身体に宿る) * “A sound mind, a sound body” の反意ことわざ？
- Up, Sluggard, and waste not life; in the grave will be sleeping enough. (1741)
(リメイク版は There shall be sleeping enough in the grave)
(怠けものよ目を覚まして人生を無駄にするな。墓に入れば好きなだけ眠れる)
- Sloth (like Rust) consumes faster than Labour wears. (1744)
(怠惰は錆の如く、労働より早く人を消耗させる)
- What maintains one Vice would bring up two Children. (1747)
(道楽を一つやめれば子供二人を養える)
- *Laziness* travels so slowly, that *Poverty* soon overtakes him. (1756)
(怠惰はのろまで、貧困がすぐに追いついてくる)

- The idle Man is the Devil's Hireling; whose Livery is Rags, whose Diet and Wages are Famine and Diseases. (1758)

(怠け者は悪魔の手先、服はボロボロ、ご褒美は飢えと病気) (1758)

* 怠けるのは確かに悪徳でしょうが、ここまで悪く言われると逆に生真面目を呪いたくなります。怠惰な身体とはどんなものなのでしょう。気になります。

3. 生活の知恵・日常生活

勤勉・節約志向が目立つ一方で、日常生活の知恵や人の愚かさを笑いで包んだことわざも数多く登場します。こちらの方がフランクリンの真骨頂だと思います。

- Lest you're too troublesom hasten away. (1733)

(面倒くさけりや、さっさと逃げろ)

- Whate'er's begun in anger ends in shame. (1734)

(怒りに始まるもの、恥に終わる) * 「短気は損気」に近いか？

- Who pleasure gives, Shall joy receive. (1734)

(楽しみを与えれば、喜びが返ってくる)

- Experience keeps a dear school, yet Fools will learn in no other. (1743)

(経験は素晴らしい学びだが、愚か者はそれに頼る)

- Dine with little, sup with less: (1744)

(晩餐は控えめに、夜食はもっと控えめに)

- Want of Care does us more Damage than Want of Knowledge. (1746)

(怖いのは、知識不足より注意不足)

- He may well win the race that runs by himself. (1747)

(一人で走れば一等賞)

- There's a time to wink as well as to see. (1747)

(見るべき時もあれば片目をつぶるべきときもある)

- We are not so sensible of the greatest Health as of the least Sickness. (1747)

(健康なことよりちょっとした病気が気になる)

- All would live long, but none would be old. (1749)

(長生きはしたし、老けたくはなし)

- Clean your Finger, before you point at my Spots. (1750)

(他人の欠点を指さす前に自分の指を洗え)

- Three Removes is as bad as a Fire. (1758)

(引っ越し3回火事1回) * 「引っ越し貧乏」

- A full Belly makes a dull Brain. (1758)

(腹満ちて頭鈍る)

* 暦初年度の、「面倒くさけりや、さっさと逃げ」は愉快ですね。秀逸なものが多く、皆さまにも心当たりのドキッとするような言葉があるのではないのでしょうか？

4. 人間関係

日常生活の知恵に加えて、人間関係のコツや怖さもことわざの重要なテーマで、特に男女関係・夫婦関係、そして意外にも友情に関するものの数が多いようです。

- Visits should be short, like a winters day. (1733)

(訪問は冬の日の如く短くすべし)

- Nor Eye in a letter, nor Hand in a purse, nor Ear in the secret of another.

(手紙は見るな、財布に触るな、聞き耳たてるな) (1736)

- None are deceived but they that confide. (1740)

(信用しなければ騙されない)

- He makes a Foe who makes a jest. (1740)

(からかいは敵をつくる)

- One Slander fifty will beget. (1743)

(一つの中傷が五十の中傷を生む)

- Vanity backbites more than Malice. (1745)

(悪意より虚栄心が陰口を生む)

*「見ざる聞かざる触らざる」だと三猿はどんな彫刻になるのでしょうか？後半の4題は現代のオレオレ詐欺やSNS炎上にも通じて痛烈です。

<夫婦関係、結婚>

- A house without woman and Firelight, is like a body without soul or sprite

(女と暖炉の火のない家は、魂を持たない体のようだ) (1733)

- Good wives and good plantations are made by good husbands. (1736)

(良い妻と良い土地は良い夫が作る)

- There are three faithful friends, an old wife, an old dog, and ready money.

(3人の忠実な友：古女房、老犬、そして手元にある現金) (1738)

- Keep your eyes wide open before marriage, half shut afterwards. (1738)

(結婚前は目を大きく開き、結婚したら半分閉じよ)

- He that has not got a Wife, is not yet a complete Man. (1744)

(嫁とらねば男半人前)

*すべて男目線ですね。女性の視点で言い換えると、「3人の忠実な友：女友達、老犬、そして手元にある現金」となり、古夫は含まれないかもしれません。

<友人関係>

- Thou canst not joke an Enemy into a Friend; but thou may'st a Friend into an Enemy. (ふざけて敵を友にはできないが、友を敵にするかもしれない) (1739)

- Promises may get thee Friends, but Nonperformance will turn them into Enemies.

(約束すると友になろうが、実行しなければ友は敵になる) (1740)

- A true Friend is the best Possession. (1744)

(真の友こそ至宝)

- Friendship increases by visiting Friends, but by visiting seldom. (1751)
(友を訪ねれば友情が深まるが、めったに訪ねなければもっと深まる)
 - Tis great Confidence in a Friend to tell him *your* Faults, greater to tell him *his*.
(友に自分の欠点を告げるのは大きな信頼あってこそ、友の欠点を告げるのはさらに大きな信頼あってこそ) (1751)
 - A false Friend and a Shadow, attend only while the Sun shines. (1756)
(偽りの友と影、そばにいるのは日が照っている間だけ)
- * 真の友情を築くことはかくも難しいものなのか、とため息が出ます。「偽りの友と影～」はぐさりと心に突き刺さります。

5. 人間性・価値観・知性

人の本質は容易に見抜けるものではありません。良好な人間関係を築くにはどんな人間性や価値観が求められるのかもことわざの主題になります。

- Men and Melons are hard to know. (1733)
(人間とメロンは割ってみるまでわからない)
 - If Pride leads the Van, Beggary brings up the Rear. (1735)
(高慢が先頭に立つと、しんがりは極貧)
 - Tis easy to see, hard to foresee. (1736)
(見るは易く、先を見るは難し)
 - If *Passion* drives, let *Reason* hold the Reins. (1749)
(情熱が背中を押し、理性が手綱を引く)
 - Hide not your Talents, they for Use were made. (1750)
(才能を隠すな、使うためにある) * 「能ある鷹は爪を隠す」の反意ことわざか。
 - E're *Fancy* you consult, consult your Purse. (1751)
(流行を追う前に、自分の財布を見よ)
 - The Doors of Wisdom are never shut. (1755)
(知恵の扉は決して閉じはしない)
- * 物価高騰の昨今、財布を覗いてメロンを割る機会を逸しました。人の本質も見えづらくなっているのかもしれない。

6. ことば・話すこと + お酒

以上のやや抽象的なテーマに加えて、フランクリンは話すこととお酒という具体的テーマに関して多くの言葉を残しています。

<ことば・話すこと>

- A Slip of the Foot you may soon recover: But a Slip of the Tongue you may never get over. (1734) (足を滑らせても、口を滑らすな)

- He that speaks much, is much mistaken. (1736)
(多弁は多誤)
 - Lovers, Travellers, and Poets, will give money to be heard. (1736)
(恋する人、旅人、詩人はお金を払ってでも話をしたがる)
 - Best is the Tongue that feels the rein; (1741)
(手綱を持った舌が最高)
 - Half Wits talk much but say little. (1748)
(浅知恵者、口数多いが中身薄)
 - Speak little, do much. (1755)
(言葉は少なく、行動は多く)「不言実行」
- * 多弁無用。おしゃべりは敵だ！耳が痛いです。でも恋話は仕方ないですね。

〈お酒〉

- Nothing more like a Fool, than a drunken Man. (1733)
(酔っ払いほど愚かなものはない)
 - Life with Fools consists in Drinking; With the wise Man Living's Thinking. (1748)
(愚か者の人生は飲むことにあり、賢者の人生は考えることにある)
 - Drink does not drown Care, but waters it, and makes it grow faster. (1749)
(飲んで憂さは晴れず、悩み深まるばかり)
 - He that spills the Rum, loses that only; He that drinks it, often loses both that and himself. (1750) (酒をこぼせば酒を失う。酒を飲めば酒と自分を見失う)
- * 自伝中の13の徳にもあるように、フランクリンは節酒を薦めています。酒好きな人（私を含めて）には耳が痛い。憂さ晴らしに飲みたくなります。

7. 権威や権力風刺

- He's the best physician that knows the worthlessness of the most medicines.
(薬が効かないことを知っている医者こそ最高だ) (1733)
- None preaches better than the ant, and she says nothing. (1736)
(蟻より上手い神父はいない、蟻は何も言わないからね)
- If thou has wit and learning, add to it Wisdom and Modesty. (1738)
(機知と学問があるなら、知恵と謙虚さを身につけなさい)
- A Plowman on his Legs is higher than a Gentleman on his Knees. (1746)
(立っている農夫のほうがひざまずいている紳士より背が高い)
- Changing Countries or Beds, cures neither a bad Manager, nor a Fever. (1746)
(国を変えても悪い統治者は治らず、ベッドを変えても熱は下がらない)
- A true great Man will neither trample on a Worm, nor sneak to an Emperor. (1746)
(真の偉人は虫を踏みつけず王にへつらわず)
- Men take more pains to mask than mend. (1757)

(人は、問題を直すよりも隠す方に多くの努力をしてしまう)

*現代の政治家の皆さんにも聞いてほしい言葉の数々です。

さらに、フランクリンのことわざには映像を彷彿とさせるものも多く、上記の分類からはみ出した面白いものを加えてアラカルトメニュー終了とします。

・What's a Sun-Dial in the Shade! (1750)

(日陰に日時計) *ビジュアルがコミカルです。

・Teach your child to hold his tongue, he'll learn fast enough to speak. (1734)

(子供に口をつぐむように教えれば、あっという間に話し出す)。*子育てあるある。

・The Devil sweetens Poison with Honey. (1747) *悪魔の得意げな顔が目には浮かびます。

以上紙面の制約で、390 のこぼれことわざから厳選 70 題をお届けしました。フランクリンは勤勉・節約だけでなく、日常生活の機微や価値観を、時に優しいユーモアで包み、時に辛辣な風刺を加えてことわざとして表現しています。一つでもお気に召すものがありましたら幸いです。

最後に私のベスト 3 を紹介します。運動会の徒競走でどうしても 3 位までに入れなかった私には、「一人で走れば一等賞」(第 3 位) がうれしく、年を重ねることには逆らえませんが「長生きしたし、老けたくはなし」(第 2 位) で若作りし、いつまでも「知恵の扉は決して閉じはしない」(堂々の 1 位) と信じて、これかもことわざ集めの道を歩みます。などと恰好を付けてまとめると、“Speak little, do much” と叱られてしまいそうですね。

[注]

1. 確認した辞典類は以下の通りです。

- ・Mieder, Wolfgang, ed. *A Dictionary of American Proverbs*. Oxford UP, 1992.
- ・Speake, J. and John Simpson, eds. *Oxford Dictionary of Proverbs 6th Edition*. Oxford UP, 2015.
- ・Wilson, F.P., ed. *Oxford Dictionary of English Proverbs 3rd Edition*. Oxford UP, 1970.
- ・大塚高信・高瀬省三共編『英語諺辞典』三省堂、1976 年
- ・澤田治美監訳『オックスフォード英語ことわざ・名言辞典』柊風舎、2017
- ・三省堂編『新 明解 故事ことわざ辞典』、2016 年
- ・時田昌瑞『岩波ことわざ辞典』岩波書店、2016 年

2. 本論での「初出」とは文献上で初めて確認された事を意味します。

[参考文献]

- ・Franklin, Benjamin. *The Papers of Benjamin Franklin*. Edited by Leonard W. Labaree, Yale University Press, 1959-2023.

[インターネットサイト]

- ・The Digital Franklin Papers: [The Papers of Benjamin Franklin \(franklinpapers.org\)](http://franklinpapers.org)

目には青葉 山郭公 はつ松魚

渡辺 慎介

この「目には青葉 ^{ほととぎす} 山郭公 ^{かつお} はつ松魚」は、江戸初期に活躍した山口素堂の俳句です。俳句ではありますが、時田さんの「岩波ことわざ辞典」にも載っています。そのまま、ことわざとしても通用しているのです。初夏の代表的な景物を愛でる言葉です。この句は極めて特異な俳句として知られています。俳句の禁じ手を二つも使っているのです。一つは季重なり、もう一つは三段切れです。第一は、季語を二つ以上使うことは好ましくないとされる季重なりに臆することなく挑戦しています。青葉、郭公、初鰹と、季語を三つも使っています。季重なりどころか、季膨れだと茶化す人もいるくらいなのです。季語だけの俳句と言っても過言ではありません。第二は、五、七、五のすべてが体言止めで終わる三段切れです。三段切れは、一句を細かく切り離してしまい、主題や意味が分散してまとまりを欠く危うさがあります。こうした禁じ手を二つも使っているにも拘らず、この俳句は名句として人々に長く愛され続けています。その理由は、こんなところにあるのかもしれませんが。まず、「目には青葉」と字余りからゆっくりと詠み始めます。それを聞く人は、次は耳かな、鼻かな、口かなと想像を逞しくします。しかし、実際には「山郭公 はつ松魚」と、耳も口も鼻も出さずに勢いよく詠み進むのです。表には出しませんが、やはり聴覚と味覚によって初夏を楽しむ風景を読み取ることができる構成になっています。季重なりや三段切れは好ましくしないとする作法違反など物ともしない逞しさがありますが、それでいながら、初夏の風情を余すことなく歌い上げています。名句と言われる所以です。

初松魚はともかく、青葉と ^{ほととぎす} 時鳥を詠んだ和歌ならすでにありました。西行の「時鳥きく折りにこそ夏山の青葉は花におとらざりけれ」がそれです。素堂は、俳句という短い17音の中に、初松魚までも押し込めてしまったのです。

この俳句が江戸っ子に大歓迎された本当の理由はほかにあります。「初物七十五日」と言い、初物を食べれば七十五日も寿命が延びると信じていた江戸っ子は、好んで初物を口にしました。その筆頭格の ^{はつがつお} 初鰹が詠まれているからです。江戸っ子は初鰹に目がありませんでした。「女房子供を質に置いても初鰹を食え」の川柳があったくらいですから、江戸っ子は初鰹に熱狂しました。しかし実際には ^{まないた} 「俎板に小判一枚初鰹」という宝井其角の句にありますように、初鰹は庶民の手には届かないほど高価だったのです。何とか手に入れても、「初鰹銭と辛子で二度 ^{なみだ} 泪」という川柳になります。泪ながらになけなしの一両を叩いて買った初鰹を食べたはいいが、辛子の辛さにもう一度泪を流してしまうという情景を描いています。江戸時代、鰹は酢に和辛子を溶いた辛子酢で食べられていたのです。辛子と言えば、三宅島に島流しになっていた ^{はなぶさいつちよう} 英一蝶はこんな句を宝井其角に送っています。「初松魚辛子がなくて涙かな」。三宅島でも鰹は取れるのでしょうが、それを刺身で食べようにも島では辛子が手に入らないので口惜しくてならない、そう嘆いているのです。其角の返しは、「そのからしきいて涙の松魚かな」です。この句の「そのからしきいて」には、「辛子が利く」と「英一蝶の芥子の話を聞く」が掛けられているようです。つまり、表向きは辛子が利いて涙するとの意味ですが、本意はその芥子の話を聞いて一蝶に会いたくなって涙するということなのでしょう。其角のこの切ない願いが叶うことはありませんでした。一

蝶は大赦により宝永六（1709）年に12年の島流しを終えて江戸に戻りましたが、其角はその2年前に亡くなってしまったのです。さらに辛子に纏わる俳句に、「初鯉江戸のからは四季の汗」という子葉の句があります。辛子酢で食べた初鯉の辛さに子葉は閉口したのでしょう。子葉は赤穂浪士の一人、大高源吾の俳号です。子葉は宝井其角の弟子であったという話もありますが、もしそうでなくても少なくとも其角と交流があったことだけは確かなようです。討入を果たした赤穂浪士に江戸っ子は快哉を叫びます。余りの拍手喝采に、幕府は打首で亡くなった赤穂浪士の追善供養を厳禁する令を出しました。そんな禁止令を気にすることもなく、其角は子葉の初七日にこの句を詠みます。「うぐひすに此辛子酢はなみだかな」。これは、明らかにすぐ前の子葉の俳句を踏まえて詠まれています。最後の「なみだかな」は、辛子酢で初鯉を食べて流す涙に子葉を偲ぶ気持ちが掛けられています。

山口素堂は、「目には青葉」と目だけを17（18）音に詠み込み、耳と口は表に出しません。言外にそれを匂わせているのですが、わざわざ目も耳も口も詠み込んだ狂歌があります。四方赤良こと太田南畝の「目に青葉耳に鉄砲時鳥鯉いまだ口に入らず」です。おそらく太田南畝は素堂の俳句を十分に理解し評価していたのでしょう。しかし、狂歌師の立場からすればやはり何らかの形で茶化さなければなりませんから、こうした形に落ち着いたのであろうと想像します。素堂の句とは対照的に、目、耳、口をわざとらしく詠み込んでいます。狂歌だけではありません。川柳だって黙っていません。「目と耳はただだが、口は銭がいり」。青葉を見る、ホトトギスを聞く、これには金は不要。しかし、初鯉を食べるには銭が必要、そう言っています。強いて、青葉、ホトトギス、初鯉を表に出さない戦法を採用し、それに代えて、目、耳、口を使っています。それでも意味は通じたのです。「聞いたかと問われて食ったかと答え」、「女房は聞き、お妾は早く食い」の川柳もあります。説明は不要でしょう。それほどまで、素堂の俳句は江戸庶民に浸透していたのです。

初鯉に現を抜かす人々を批判する江戸っ子ももちろんいました。川柳に「初鯉そろばんのない内で買い」がそれです。値が張る初鯉を買い求めるのは経済観念に欠ける家庭であると揶揄しています。また、「金持ちを見くびって行く初鯉」の川柳もあります。金持ちは倏約を旨としますから、初鯉に手を出しません。無駄遣いはしないのです。棒手振りの魚屋も金持ちの家は敬遠して遣り過ごしたのでしょう。盛期になれば安くなる鯉です。川柳にも「初鯉俄かに安くなる魚」や「落ちぶれるものは鯉の値段なり」と詠まれました。しかし、盛期まで待つて食べるのは野暮と考え、江戸っ子は初物にこだわったのです。

俳聖とも称される松尾芭蕉も初鯉を詠んでいます。「鎌倉を生きていでけむ初松魚」です。迅速な物流が確立された現代なら、二月になればもう鹿児島で捕れた鯉が店頭並びます。江戸っ子はそれを初鯉とは呼びません。相模湾で水揚げされた鯉が初鯉なのです。相模湾とは言え、やや大目に見て、伊豆半島沖から、大島、三宅島などの伊豆の島々、房総半島にかけて捕れた初鯉が日本橋の魚河岸へ運ばれたようです。しかし典型的には、鎌倉や小田原で水揚げされた鯉を指します。特に、鎌倉から送られてくる初鯉が有名だったようです。ですから、芭蕉も「鎌倉を生きていでけむ初松魚」と詠んだのです。太田南畝も狂歌「かまぐらの海より出しはつ鯉みなむさし野のはらにこそいれ」を詠んでいます。やはり、初鯉は鎌倉で捕れた鯉なのです。この狂歌の「武蔵野のはら」には、「武蔵野の原（＝江戸）」と「腹」が掛けられ、「江戸っ子が食べ尽くす」と言っています。

上に示した芭蕉の俳句の句碑が昔の戸塚宿にあることを最近知りました。それは、戸塚宿の上方見附（上方方面からの入り口。反対側の入り口は江戸方見附という）に近い富塚八幡宮にあります。嘉永 2（1848）年に当地の俳人達によって戸塚にちなんでこの句碑が建てられたそうです。戸塚にちなんで、と言うのは江戸に向かい大急ぎで運ばれる鰯が戸塚経由だったことにちなんでいるのです。もっとも、鎌倉から江戸に至る道筋は、まず鎌倉道に沿い戸塚宿迄進み、そこからは東海道を江戸まで行くのですが、鎌倉道と東海道が交差する地点は、戸塚宿の内側にはありますが、戸塚宿の中心部からは外れた江戸方見附に近い所にありました。それが分かるのは、広重の東海道五十三次の戸塚の版画です。そこには、「こめや」の看板の懸る茶店前で旅人が馬から降りようとしている、あるいは乗ろうとしている場面が描かれています。背景には橋が描かれ、その袂には「左りかまくら道」の道標が立っています。この道は鎌倉への近道です。本道は戸塚宿の真ん中を通っていましたが、しばらく行くと近道と交わります。また、その橋は大橋と呼ばれていました。この橋は戸塚宿の内側の、しかも江戸方見附に近い場所にあったことは昔の戸塚宿の地図から明らかです。鮮度が命の鰯ですから、早荷で届けようとすれば、近道を通るのは当たり前です。つまり、鰯の早荷は戸塚宿の端っこを通ったに過ぎなかったのです。

広重の戸塚の版画には、「こめや」の前で旅人が馬から降りようとする姿を描いたものと、馬に乗ろうとする姿のものの二種類があります。前者は初期の版画、後者は後期のものです。東海道五十三次の版画は、好評でよく売れたそうです。大量の版画を摺って版木が摩耗したため、新しい版木を作り直すときに絵柄も替えたといわれています。

芭蕉の句碑は鎌倉市内にもあります。鎌倉文学館の庭にある小さな碑がそれです。そこには「鎌倉は生きて出にけん初松魚」とあります。句集によって「鎌倉を」であったり、「鎌倉は」であったりと表現が異なるようです。

芭蕉の「鎌倉を生けていでけむ初松魚」の歌碑が、戸塚宿上方見附に近い富塚八幡宮にあるのも、鎌倉文学館の庭園にあるのも、しっくりしません。鰯の水揚げ地でも、江戸までの輸送経路でもないからです。鎌倉文学館は、鎌倉駅から大佛へ行くバス通りの途中にあり、バス停から山側に入った所に位置します。海岸の由比ガ浜から 600m 程離れています。また、そのバス通りから大佛の前を通る道は、鎌倉に出入する道には違いありませんが、江戸時代に鰯の荷がその切通しを通ったとは思えません。江戸に出るには遠回りの道だからです。ただし、昔は家が少なく、鎌倉文学館の地から由比ガ浜が見えたそうです。また、戸塚宿の富塚八幡宮も、上方見附に近い位置にありますから鰯の早荷の通り道ではありません。ですから、芭蕉の歌碑が立つ二つの場所は、やや場違いの感は免れません。

それでは、鎌倉から江戸まで一体どんな経路で鰯が運ばれたのでしょうか。戸塚宿経由の鎌倉道・東海道の経路は当然考えられます。しかし、それだけではなかったはずです。「日本橋魚市場の歴史」（岡本信男著、1985 年）という本にはこんな記述があります。

カツオの初入荷は、鎌倉方面からの特別な押送り舟で行われたことであり……とあります。押送り舟を使った海路もあったことを示しています。押送り舟は、葛飾北斎の富嶽三十六景の中の名画「神奈川沖浪裏」に描かれた三艘の舟がそれです。「押送り」は「おしおくり」、あるいは「おしょくり」と読まれ、櫓を押して舟を進めたそうです。高速性能を得るために細長い船型に作られ、標準的には全長三十八尺五寸（11.7m）、肩幅八尺二寸（2.5m）、深さ三尺（0.9m）とされ、帆走用に六反の帆を張るようになっており、漕

ぎ手は“水王”と呼ばれ五、六人が定員であったそうです。「神奈川沖浪裏」の押送り舟には帆が描かれていません。帆は有効な推進力を得ることもできますが、帆柱などの重量を考慮して、それを積まなかったことも少なくなかったようです。さて、鎌倉方面からの押送り船で、鰹の初荷が送られたと書かれていますが、それはどんな海路だったのでしょうか。鎌倉は相模湾に面していますが、三浦半島の付け根に位置すると見ることもできます。海路で江戸へ運ぶには、三浦半島をぐるりと回り、浦賀から東京湾へ入って江戸まで運ぶという航路が考えられます。三浦半島の先端まで行き、そこからまた三浦半島の付け根にある横浜市の金沢八景辺りまで戻るとい、やや遠回り^{よがつお}の道筋です。それでも、鎌倉で朝捕れた鰹が、夜には江戸に届いたそうです。それを夜鰹と呼びました。宝井其角が点者をつとめた「末若葉^{うらわかば}」には、「また今宵^{よばなしのま} 夜話亭にうかれ鳥 新場の鰹 たちまちになし」の句が残っています。新場とは新肴場^{しんさかなば}の意であり、今の横浜から三浦半島一円の浦で捕れた魚を扱う魚市場を指します。日本橋の魚市場から独立して本材木町に開設された新たな魚市場のことです。ですから、新場の鰹は、鎌倉ないしは相模湾の浦々で捕れた鰹を言います。新場の鰹は、到着すると直ぐに食べられてしまったことを詠んでいます。また「夜鰹やことに薬師の御縁日」あるいは「夜鰹やことに薬師の引合せ」の句も別の句集に残されています。新場の夜鰹は有名だったのです。薬師様の引き合せ（縁）で夜鰹に在り付くことができてありがたい、と言っています。しかし、鰹の輸送にはもっと近道もありました。陸路と海路を併用する経路です。鎌倉の海岸から若宮大路を進むと鶴岡八幡宮に突き当たります。そこを左に曲がれば二里半で戸塚宿に至りますが、右に折れれば、現在の横浜市の六浦や金沢八景に至る二里の道になります。その道の途中にある朝比奈峠は、江戸時代にはその手前で山を越える旧道が使われていました。今はハイキングコースになっています。徒歩で行けば、旧道を行く方がむしろ近道と考えられるほどであり、しかも山道は急峻ではありません。六浦まで出れば、そのあとは平潟湾から押送り舟で江戸まで鰹を急送することができました。ある俳書の序に「六浦の押送りふね、夜鰹来ぬ間に蓼^{たです}酢にてのさし身も涼^{すずやか}也」とありますから、六浦から押送り舟で運ぶ鰹は夜鰹よりも早く江戸に届いたのです。もちろん先に述べた陸路による早荷も使われていました。「其角の『馬舟とわかる鰹やけいば組』という句も、相模の海で漁った鰹を、神奈川から馬の背に八里、夜通し江戸へ送って、翌朝の入荷になると、船路を回して新場の夜鰹にするのことがあることを言ったので、漁獲の時間によって、運搬も水陸の異を来す。そして運搬を急ぐさまは、競馬のようであった。」（「三田村鳶魚全集」第十五巻「初鰹」）という説明もあります。漁獲の時間によって、運搬を陸路と水路に別ける判断基準は分かりません。午前中に水揚げされた鰹は水路で、午後の水揚げは陸路で江戸へ運ばれたのかもしれませんが。午後水揚げされた鰹を水路で江戸へ送っても、夜鰹には間に合いません。

要するに、鎌倉から江戸に運ばれる鰹は、①戸塚宿経由の陸路によるもの、②三浦半島を迂回して、東京湾に入る水路によるもの、③六浦までは陸路、その先は水路と、水陸併用によるもの、大まかにはこれら三通りの輸送経路があったようです。江戸までの時間の早さは③、②、①の順番だったようです。初鰹は、特に時間との勝負でしたから、③または②の輸送経路が用いられたものと思われます。

芭蕉の句碑から話が発展して、鰹の輸送経路にまで話が及びました。話を句碑に戻します。ところで、山口素堂の句碑はあるのでしょうか。実は、山梨県にあります。どうして

海なし県の山梨かという、そこは素堂の生誕の地だからです。山梨県でも、長野県に近い場所です。JR 中央線の小淵沢駅から国道 20 号線迄下った辺りは上教来石^{かみきようらいし}という地域です。今は北斗市白州町になります。素堂はそこで生まれたのです。国道 20 号線沿いの山梨と長野の県境に近いコンビニの駐車場にその句碑があると聞いていましたが、訪れたことはありませんでした。その後、句碑は撤去されて何処かに移設されたと聞きましたが、その移設先が分かりません。ところが、ある時、「道の駅はくしゅう」という所に立ち寄りしました。その道の駅の中庭というか前庭とでもいうところに、件の句碑があるのを偶然見つけました。道の駅に移設されていたのです。そこにはこう記されています。

目には青葉 山ほとゝぎす 初かつお

山口素堂先生出生之地

越山 田中角栄書

世話人 金丸信

昭和五十八年六月

……

どうして田中角栄が出て来るのか、よく分かりません。能筆と言われていた田中角栄に地元山梨の政治家金丸信が依頼したように見受けられます。本来なら、「かつを」と書くべきでしょう。白州の他の場所と山梨県の甲州市にも素堂の句碑があるそうです。さらには、素堂の墓所のある東京の寺にも、やはり句碑が立つと聞いています。「目には青葉…」は誰もが知る俳句ですから、あちこちに句碑があっても不思議はありません。

ところで、「目には青葉…」の俳句には詞書（前書）があります。「かまくらにて」、あるいは「鎌倉一見の頃」との詞書です。芭蕉の「鎌倉を生けていだけむ……」は、元禄 5 (1692) 年、芭蕉 49 歳の時の句であるとされていますが、それを詠んだのは、鎌倉ではなく江戸であったということです。一方、素堂の「目には青葉…」は詞書に「かまくらにて」とあるならば、鎌倉にその句碑があってもおかしくはないでしょう。しかし、句碑があると聞いたことはありません。なお、素堂の句が載る俳諧集「江戸新道」は、延宝 6 (1678) 年に刊行されていますから、芭蕉の句とほぼ同時期に詠まれたことになります。

素堂の句碑については、10 年ほど前、一つの記憶があります。それは、ある「中学校理科」の教科書の出版記念パーティーが東京御茶ノ水のホテルで開催された時でした。その教科書全体の編集責任者は有馬朗人先生でした。我々は、物理や化学など各分野の執筆者だったのです。有馬先生は、原子核物理学者であると同時に俳人でもあり、晩年は政治家として活躍されました。そのパーティーに有馬先生は開始時間ギリギリに到着されました。吟行に出掛けて遅くなってしまったと、頻りに詫びておられました。鎌倉へ吟行に行き、ある俳句の句碑を立てることを地元の方に提案をしたと仰っていました。誰のどんな俳句なのかは聞き漏らしました。後で有馬先生に伺うべきでしたが、それも忘れてしまいました。しかし、暫くしてそれが分かりました。ネット上のあるブログに有馬先生が吟行で話されたことが載っていたからです。有馬先生は鎌倉に隣接する逗子市の小坪漁港で、山口素堂の「目には青葉…」の句碑を建てるよう提案したようです。そのブログから一部を引用します。

これはわたくしが住んでいる逗子の小坪港で詠まれた句である。虚子の言う「相州初鯉」にあたる。実は、小坪で詠まれたというのは懇意にしている釣船「何々

丸」の船長から聞いた。で、船長は、有馬朗人文部大臣が小坪港に来た時に、この句がここで詠まれたと聞き、ここに素堂の句碑を建てなければならないねと言ったとのことで、あの句碑を建てる話はどうなったかと、わたくしが俳句を詠むことを知って聞かれたが、そんな偉い人と面識があるはずもないし、俳人はおおむね貧乏で、政治家となれば二枚舌が常だから、それは御愛想だろうと言うと、実に心外な顔をする。小坪は小さな漁港で、釣船も数隻しかないが、みな小坪の海を大切にしているので、有馬大臣も罪な戯言を言ったものだ。

有馬大臣がこの戯言を言ったのは、2015年12月6日でした。私は記憶が悪いので、教科書会社の編集部の方にパーティーの開催日を教えて貰いました。このブロガーも山口素堂が「目には青葉…」を小坪で詠んだことは知らなかったようです。有馬先生が小坪のある船長に話したことを又聞きして、そう信じておられるようです。このブロガーは俳句を詠むことが記されていますが、どうもこの方の人間理解は型にはまり過ぎていて、他人事ながら心配になります。有馬朗人は政治家だから二枚舌は当たり前、平気で戯言を言う、そのように理解しておられるようです。こうした人間理解で俳句が詠めるか、気になるのです。川柳ならよいかもしれません。私が理解する有馬先生はそんな方ではありませんでした。上記のパーティーでも、東大の若い物理学者をつかまえて、「君たちが頑張らなければだめだよ」と東大物理学教室の将来を気遣っておられました。物理学者の有馬朗人になり切っていました。政治家としての面影はまったくありません。おそらく小坪で何だか丸の船長と話をされた有馬先生は、俳人になり切っていたのであろうと想像します。だから、船長も素堂の句碑を建てなければと真剣に考えるようになったのでしょう。

それはともかくとして、有馬先生が素堂は小坪で「目には青葉…」の句を詠んだという上のブログの内容は俄には信用し兼ねます。そんなことはないだろうというのが私の第一印象です。小坪は鎌倉ではありません。江戸時代の人には案外地名に厳格であった例を知っているからです。たとえば、鎌倉ハムです。鎌倉ハムは鎌倉が発祥のように思われがちですが、そうではありません。横浜市戸塚区なのです。江戸時代に今の横浜市戸塚区の村々は、相州（相模国）^{さがみのくに}鎌倉郡に属しており、戸塚宿も相州鎌倉郡でした。鎌倉ハムを名乗るメーカーは何社かあります。その一つ、富岡商会のホーム・ページにこんな記述があります。これに対し、異なる説明…異説…もあります。

ペリーの来航から10年後の文久三（1863）年、開港間もない横浜に英国人ウィリアム・カーチスが上陸しました。…彼は、明治七（1874）年、鎌倉郡下柏尾村に開いた観光ホテルの裏に牧場をつくり、家畜を育て、ハム、ベーコン、牛乳、バターの製造を始めました。カーチスはハムの製法を秘密にし、日本人の工場への立ち入りを禁じていましたが、明治十七（1884）年、地震による工場の出火を村人が消火した恩に報いて、ついに秘伝の製法を村人に伝授。後にカーチスは日本を去りましたが、鎌倉の地には、ハムの製造者、技術者が確実に育っていきました。製造されたハムは…発祥の地名から『鎌倉ハム』として広まっています。鎌倉郡下柏尾村が発祥の地だから、鎌倉ハムと名乗ったのです。当時の鎌倉郡という地名を忠実に使っています。いい加減に鎌倉の地名を使ってはけません。異説でも同様です。

先に、新場、つまり新肴場の魚市場について述べました。延宝二（1674）年に日本橋本材木町に開設されたこの魚市場に当初から参加した17の浦（それを、附浦と呼びます）の

中に小坪村があります。その新肴場に関する古文書の中に（カッコ内は現在の住所）

相州三浦郡 小坪村（逗子市小坪）

とあります。それに対して延宝五（1677）年から新肴場に加わった附浦として

相州鎌倉郡 材木座村（鎌倉市材木座）

坂之下村（ 〃 坂ノ下）

腰越村（ 〃 腰越）

片瀬村（藤沢市片瀬）

江之嶋（ 〃 江の島）

など 14 村が記されています。小坪は明らかに鎌倉でも鎌倉郡でもないのです。それならば、江戸時代に鎌倉の海で、間違いなく鰹漁をしていた記録が残っているのでしょうか。漁業資料は手に入りませんでした。貝原益軒の紀行文…^{じんしん}壬申紀行…にそれが残されています。壬申紀行は、藩命により筑前国を立ち江戸到着までの旅日記です。時は元禄五（1692）年、益軒六十三歳の旅です。筑前荒津から舟に乗り播州室津に至り、書写山に参詣し、次いで姫路から兵庫を経て船で大阪へ向い、久宝寺、八尾を過ぎて生駒山を越え、立田川を見て京を過ぎ、伊賀、伊勢を通して東海道人に入り、途中で興津から身延山、富士山に立ち寄り、江の島と鎌倉を回って江戸に入る旅でした。益軒は藩費を使い存分に旅を楽しんだようです。その中に「鎌倉遊覧」があり、その出出しにこう書き残しています。

^{えのしま}江島を出て腰越を通る。こゝにも町あり。万福寺といふ寺に、義経の頼朝にをくりし状の写あり。……こゝを過、^{しちりがはま}七里浜と云海辺を通る。西は山なり。新田義貞、鎌倉に責入給ひし時通られし稲村が崎を右に見て、極楽寺の切通しより入る。星月の井、はせ（長谷）の町を通り、^{ゆい}油井の浜を右に見て雪の下客舎につく。こよひはこゝにやどりぬ。鎌倉の海、今は鰹といふ魚をとるとて、海に浮べたるおほくの漁舟有。生なる鰹おびたゞしく持はこぶ。

ここに「極楽寺の切通しより入る」とありますのは、「極楽寺の切通しより“鎌倉に”入る」の意味なのでしょう。広い鎌倉郡ではなく狭い意味の鎌倉は、七箇所あった切通しの内側に限られます。同じように「新田義貞、鎌倉に責入給ひし時通られし稲村が崎」も、稲村が崎を通り海岸を回って狭い意味の鎌倉へ攻め入ったと理解出来ます。そうであれば、「鎌倉の海」はすぐ前に出た油井の浜になります。つまり、油井の浜（由比ガ浜）の沖合に多くの漁舟が浮かび、鰹漁をしていたのです。そこで水揚げされた鰹は、正真正銘の鎌倉の鰹です。もちろん、腰越や小坪で捕れたとしても、江戸まで運べば、「相州の鰹」、「鎌倉の鰹」で通ったでしょう。しかし、山口素堂が「かまくらにて」と書いたとすれば、由比ガ浜、坂ノ下、材木座で捕れた鰹を「はつ松魚」と詠んだに違いありません。小坪ではなかったはず。ネットには材木座説が実しやかに流布しています。

益軒の紀行文を読めば、芭蕉の句碑が鎌倉文学館にあるのも何となく納得できます。

なお、「鎌倉にて」の詞書は徒然草第百十九段の「鎌倉の海に、かつをと云ふ魚は…」を踏まえたものとの説明もあります。この説によれば、詠んだ場所は問題になりません。

「目には青葉…」の句碑を建てるとするなら、由比ガ浜や材木座、坂ノ下の海岸、あるいは、その近辺になるのではないかと想像しています。有馬先生には申し訳ないのですが、小坪は考えられません。先生は証拠をお持ちだったのかもしれませんが、もうそれを伺う事は出来ません。いずれにしても、この句を詠んだ場所の特定は未解決なのです。

私家版 卓球カルタ

山口政信

い 意に適う術語を編む

学習者は指導言語を加味した、独自の運動処方のための言葉（術語・自分語）を編む作業を続けたい。それは動作に直結する自分の言葉であって、既に創作ことわざであり、技・業を用いた〈わざ言語〉だと言える。卓球カルタを創るとは、自分語で卓球の論理を構築する〈わざ〉なのである。《活かすも殺すも自分次第》

ろ 論理と感覚の往還

ことわざは左脳と右脳に橋を架ける機能がある。表題の句を噛み砕けば〈論理を感覚に落とし込み、感覚を論理で説明せよ〉となるが、語り口は平叙文に近い。そこで2つの動詞を省き、往還という語を補って体言止めにして、架け橋のイメージを強めた。練習し、試合に参加するということは、この往還を繰り返すことに他ならないと理解したい。

は はやる心の仇桜

はやる気持ちが一球を失い、打ち急いで勝利を逃してしまうという意味。伝承ことわざは「急いては事を仕損じる」と教えている。はやると呼吸が浅くなり、上体は前傾ではなく前屈して前のめりになり、ラケットを持つ腕は伸びた状態になって対応力に欠けて当てただけになってしまう。《はやるな・間を取れ・半呼吸》がよさそうだ。

に 逃げるな向かへ迎え打て

ひるむことなく積極的に攻めよ、チャンスをつくって/チャンスを待って果敢に打てという意味。主眼は〈迎え打て〉にある。〈撃て〉ではなく〈打て〉と記したのは、卓球らしくするため。相手が打ってくるのを待ち構えて打ち返せという意味である。カウンター攻撃は闇雲に仕掛けるものではないと心したい。

ほ 母指球に乗れ

母指球は①体重を支える ②床を蹴る ③衝撃を吸収する ④バランスを保持する ⑤指の動きを助ける等の役割がある。適度に膝を曲げた前傾姿勢が取れると、重心は母指球に乗り動きは俊敏になる。べた足・踵重心は前傾姿勢が取れていない証拠で、始動が遅れる。小指側に乗ると膝が割れてスウェーし、戻りが遅れてラケットは安定しない。

へ 下手の大振り

もじりのコツは同じ音数、同じ母音、異なった子音の言葉を選び、短文に昇華すること。日本語は音節が少ないために同音異義語や類音異義語が多く、もじりが創りやすい。元句と創作句をローマ字書きにして対比してみると、この原理が分かりやすい。

(元 句)	h e t a n o y o k o z u k i
(創作句)	h e t a n o - o - o b u r i

と 跳ぶな摺り足、次への備え

足捌きの要点を取り上げた句。摺り足とは極端だが、跳んで目線が上下しては打球が不安定になる。次の構えから打球への好循環を生むには、足が床の上をスムーズに移動することが肝要。必然として、よいフットワークはドタバタした靴音を発しない。

ち 近くの球には身を開き、遠くのボールには身を寄せる

突然、右ミドルにきたロングボールには、左足に体重を移し、右腰を捻って身体を開くと懐が深くなって対処しやすい。遠くのボールには、上半身を傾けずして一歩動で飛びつく。ドライブの場合は足をやや後ろに着くと、打点は遅れるがしっかり打てる。

り リンゴの皮をむくように

下回転のショートサーブを出す技法のたとえ。回転量の多いボールを処理する法である。キーワードが示されていないことがこの句のミソ。卓球の練習中であれば、リンゴの皮を剥いた経験と結びついて瞬時に閃くはず。実効性の高い譬えである。

ぬ 主はボール

ボールを活かすことが球技の神髄。自分はそのサポーターに過ぎない。が、その報酬はいかようにも自分に返ってくる。元は仏教用語とされる慣用句に〈捨て鉢〉と〈捨て身〉がある。「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」という句とともに身心に留めておきたい。

る ループでつなぎ次で決める

ループスイングには、積極的に仕掛ける時と、神頼み的な時がある。前者は相手の想定外のスピードや角度、回転のボールで驚かせ、次のボールを決めに出るという攻めの戦術。後者は時間稼ぎの要素があり、ロビングを上げるほどの劣勢ではない場合に有効。

を 遅れたなりに懐を深く

予期せぬ出来事にも、それなりに対処法があるということ。遅れたら遅れたなりに打点を遅らせてでも懐を深くしたい。その時のスイングは小振りがよい。予期せぬ出来事に遭遇すると、高次機能を担っている前頭葉が活性化するとか。ボケてる暇はなさそうだ。

わ 分からずともやってみよ

分からないなら、分からないままにやってみよということ。『このことわざ、科学的に立証されているんです』⁽¹⁾の著者：堀田秀吾氏は、「あとでやろうはバカヤロウ」ということわざを創って座右の銘にしている。韻を踏んだ処世のための術語として見事。

か 形をつくり個性を磨け

〈かたち〉とは、普遍的な型（かた・フォーム）の上に築くべき、己の血が通ったスタイルのこと。型の別名を基礎/基本、セオリーと言ひ、この型に血を注入したものがスタイル、すなわち〈かたち〉。別の名は個性、またの名を癖という。型を学び、型に学べば、個性/癖は強力な武器として形づくられる。

よ 横回転、壁になって見定める

初学者には、壁に見立てたラケットでボールが反発する原理/法則性を語ってもらう。横回転に限らずこの学習法は、〈右なら左〉といった記憶に残りやすい言葉に短縮し、それをさらに解凍して他者に説明できればOK。術語/自分語ができた後は実践あるのみ。

た 卓球は疾走中のチェス

前号（8号）では、「卓球とは100m走をしながらチェスをするようなスポーツだ」という荻村伊智朗さんの言葉を紹介した。今回は尊敬の念を込めて援用・短縮してみた。

れ レシーブ力は予知力に如かず

相手ボールが自分コートに落ちる位置を予測する能力自体が、レシーブ力だということ。ボールの落下位置を指で示す訓練により、レシーブだけではなくラリー時においても威力を発揮する。スマッシュの困難な3次元的打点も、明確に描けるようになる。

そ 逸れる球にはバウンド直後

回転量の多い横回転ドライブや高く飛んでくるループドライブには、その癖を見抜いて落下点の手前にラケットを合わせ、大きく逸れる前の早い打点で処理することが大切。初・中級者は面の角度を考慮し、ネット方向に少し押すのがコツ。空振りは避けたい。

つ ツツスキの根競べ

ツツスキとマクラは、選手や落語家の個性が際立つ重要な〈わざ〉として存在する。「ツツスキだけで勝てる」という言葉もあるほどの意味をもつ技で、運・鈍・根の根、根気のよさを競う根競べである。バチカンのコンクラーベとは比べようもないが、勝機をうかがう根競べであることから、この技術はチャンスメーカーであるとの認識がほしい。

ね ネットイン、練習中も食らいつけ

練習中にネットインが生じた時も、ラッキー/チャンスと思って食らいつけという意味。《練習で起きることは試合でも起きる》《練習は試合のように、試合は練習のように》と考えれば、練習と試合の距離を縮めることの意義が理解されよう。

な 7で来たなら3で返せ

レシーブを無難に収めるには、7という強さのサーブがきたら3で受けるのがよいという意味。6なら4だが、この技術的精神の在り方は、合気道に見る相手の力と合一して受け流すという体術に合致している。「怒ったサーブには怒り返すな」と同義。えっ？10で来たらどうするかって？ それは恐らくサーブミス。

ら ラケットの高低は肘にあり

ラケットの高さ調整は肘で行えということ。台上の短いボールに対応する技法。前腕を水平に保つことで安定した面づくりができる。が、突っ立っているは無理。なお、足の長いボールに対しては、膝の曲げ伸ばしによって重心の高低を調整するのがよい。

む 難しいは面白い

難しいと感じたことを面白い・楽しいと表現する習慣をつければ、やる気が満ち技能の向上がもたらされる。難しいという否定表現は思考停止を招くばかりか、コーチの気力をも削ぐ。もし難しいと言ってしまったらどうするか。「けど、面白い」と付け加えよう。笑顔による好循環が生まれること間違いなしだ。

う 動かしておけば動かさずとも可なり

待ち受ける準備段階で小刻みに足を動かしておけば、素早く動けてスムーズに打点に入ることができる。足に軽い予備緊張を与えておくことによって俊敏な動きが可能となり、無為にラケットを動かさずとも面は既に調整済みということ。

の 乗っている時の多言は無用

選手の調子がよい時には周りも誇らしく思い、つい喋ってしまいがち。選手には悪乗りしない程度に話させ、こちらは傾聴するのがよい。不調な時はよいところと足りないところを短く助言し、思いの丈を吐き出させた後は勇気づけて送り出すのがよい。

お 押すつもりで打ち、打つつもりで押せ

ツブ高ラバーのフォアハンドストロークにおける技術特性を捉えた句。同じ構えからでも前者は打ち、後者は押すことで有為な球が出せる。この技法はフェイクモーションとしても有効である。なお、相撲界には「押さば押せ引かば押せ」ということわざがあるが、ツブ高では〈押す・打つ〉が互いに入れ替わるところに言葉の技巧が見られる。両者は優劣の問題ではなく、いずれも種目特性に関わる味わい深いものがある。

く 苦しい時のブロック頼み

「苦しい時の神頼み」の元句取り。ブロックは防御の技法だが、攻撃にも活用できる守護神的な存在でもある。返球コースを厳しくしたり、回転に変化を加えて相手のリズムを崩すなど、それなりの反攻力を有している。ブロックは窮鼠にも似る存在として貴重である。因みに、バレーボールにおける快感の No.1 は、ブロックが決まった時らしい。

や やけの無茶振り

無理をするかしないかが成否の分岐点となる。が、無茶をしては「元の木阿弥」どころか「元も子も失う」。「やけのやん八、やけっぱち。便所の火事でヤケクソだ、そんな冗談よし子さん」。「相手に見たりこのそぶり、勝負はいただきご馳走さん。何食わぬ顔で冷静に、勝負は駆け引き騙し合い、糠喜びにならぬよう、『一寸先は闇』だから」。

ま 間に合わぬ間のラケット

予期せぬ球が来た時には、体勢を整えるのに時間を要する身体より、素早く動かせるラケットを優先しようという提言。相手の強振が目に入ると、つい強く振ってしまうのが人情だが、そこは確かな面をつくるなどしてクールに統御すれば、展望も開けようというもの。《とりあえずのラケット》であっても、しぶとく生き延びることができる。

け 経験がゆとりを生む

「経験者語る」という文言に漂う雰囲気の一つに〈ゆとり〉がある。経験の差はゆとりに現われる。ゆとりが意識されるのは、ゆとりがない時なのが妙なところ。その現象が口の渴きや筋肉のこわばりといった身体的な不具合として表出するのは、身心一如である証であろう。適度な緊張は試合には不可欠だが、過緊張は禁物。経験を積みたい。

ふ 踏み込んだら戻れ

踏み込んだならすぐにニュートラルポジションに戻れ、ということ。短い球には足を台下に入れるが、そのままにボールに見入って戻りがないと、返されてきたロングボールへの対応が難しくなる。台との適切な〈自分の距離〉を確保すること忘れぬように。

こ 腰で打て

「漆は腰で塗れ」ということわざが『日本の職人ことわざ事典』⁽²⁾に記され、解説には「手先だけの仕事とみられるが、この作業は呼吸と足腰のリズム、タイミングが肝心で、…」とある。また「腰の入れよう」には、「仕事中の職人の腰はその人の技量、人格をも示すとされているで、職人の全てがその腰で判断できるというのである」が見られる。

え 笑みに秘めた横切り

「にっこり笑って人を切る」とは水島新司の『ドカベン』に登場するセリフ。〈素知らぬ顔でビシバシと、ヒョイと落としてネット際〉なんて、ニヒルかも。ラテン語の「何もない」が語源のニヒル。派生した表現がクールでカッコいい。歯を食いしばってはすべてが硬直。気づいた時には口を開け、「馬鹿だね」とつぶやきながら息を吐く。(E)！

て デッドスペースをねらえ

死んだ個所とは物騒だがこれが現実。《攻めれば狭く守れば広い卓球台》。そこには死角が必ず生じる。一流選手さえも啞然とボールを見送ることがあるのだから、素人には死角だらけで○はなし。《練習とは死角をねらい、死角をなくするに如かず》である。余談ながら、スポーツ界では〈死〉を用いた表現がしばしば使われる。死球、憤死、死に体、死の組、死のロード。〈突然死/sudden death〉や〈キル/kill〉もあったよなあ。

あ 頭は手足の内

体重の10%もある頭。その頭が勢いのあまり足幅の範囲からはみ出すとバランスが崩れ、打球は安定せずに勢いを失う。当然ながら次への反応も遅れ、劣勢を強いられることに。足を送って自分に合った基底面積を広げ、頭がはみ出すことのない〈好撃〉を。

さ 三度目の閃きが原点

1 度目は〈へーそうなんだ〉と感心するが上の空。2 度目は〈アーそうだったのか〉と甦るもまだ他人ごと。さすがに 3 度目となると〈アアなるほどね〉と経験に照らし合わせて閃くものがある。が、技能は未達。ここからが本当のスタートであって、納得できるものを求めて倦まず弛まずである。《お百度を踏む覚悟なくして勝利なし》

き 器用だねェ

決して誉め言葉ではない。が、愛情たっぷりの句。この句が聞かれる主な場面はフォアドライブの練習時。ラケットがボールに合っていないことを感じ取り、あわてて面を修正する時に、ラケットがヒラヒラと蝶が舞うように見える。時すでに遅く「後の祭り」でしかない。この句にはアイロニーが含まれているが、皮肉というよりユーモアの色彩が濃い。笑顔で語りかけられると、こちらもつい笑ってしまう。

ゆ ゆっくり当てて、素早く戻れ

レシーブとは、受ける/受け取る/受け入れるという意味で、卓球でのそれはゆっくり確実に、と言い替えられる。そのレシーブの代わりに、素早く自分のポジションに戻り、次にボールに備えたい。が、現実は得てして逆。打ち急ぐのに戻りは遅くてポイントを失う羽目に。「急いで結婚し、ゆっくり後悔しろ」ということわざが欧米にある。「後悔先に立たず」の通りだが、せめて卓球では、と念じている。

め 面を出しながら引け

出しながら引くとはこれ如何に？ 字面は矛盾しているこの句が、発想の転換をもたらしてくれるかもしれない。返球において重要な課題の一つに、相手のボールを受け止め、反撃するためのラケット面をつくっておくことがある。そのためには、ラケットを引いてから面を出すのではなく、打った後は素早く引きながら面を出せ、面を出しながら素早く引け、と論じている。

み 見えない足を見る

衆目は台上にくぎ付けになろうが、注目すべきは台下に見る足運び（構え）にある。「荻村伊智朗氏が外国選手に接した時には、台上ではなくラケットを活かすための足に鋭い視線を送っていた」という逸話を師から聞いた。確かに台の向こうでボール出してくださる師も、見えないはずの足捌きへの言及がある。膝にも目があるかのようにである。

し 下回転には「雑巾掛け」、無回転には「袈裟懸け」

比喩を用いたレシーブの基本を示す名諺。「形と心が一ぺんにわかりました」⁽³⁾と言わしめるほどの絶大な効果があるたとえ話。下回転サーブには、低い姿勢から前腕を水平に保ち、台の表面を雑巾掛けするように低くラケットを押し出す。無回転（ナックル）サーブに対しては、斜め上から袈裟懸けに（45度の角度で前下に向けて）切り落とせということ。回転が分からない時に心掛けることは？ その時は「問い掛け！」。？…。

え エンド狙いにサイド切り、その前提にフォアの前

基本はレシーバーのフォア前へのショートサーブ。地味であるが2バウンドの下回転。である。意表を突いて台の端や隅に送るロングサーブは、レシーバーが台に近く構えている時などにチャンスがあり、サイドを切るサーブで大き相手を動かすのも一計だ。が、考慮すべきはリスクのこと。「虎穴に入らずんば虎子を得ず」でいくか、「君子危うきに近寄らず」かは思案橋。ブルースを聞くのも悪くはないが、ここはやはり練習しかない。

ひ 膝を曲げても両肩水平

右手で打つ人は、右膝を曲げて重心を乗せる。しかし、同時に右肩が下がり、バックへ返球されるとシーソーを元へ戻すべく、ギッタンバッコンが生じて対応が遅れる。この現象を回避するためにはラケットを引きながら腰と肩を回し、左膝の力を抜いて爪先で床に接しているのがよい。フリーハンドをラケットの高さに揃えると、美しいかたちが整う。

も モーションはエモーション

モーションとは〈動き〉それ自体を意味するラテン語が元になっている。エモーションも同じ源をもち、〈揺り動かす〉から派生して感情、情緒、感動、感激などを意味するようになった。表題の句には、両者の外部刺激はもとより、内発的な情動によって引き起こされる動作/感情の総体が表現されている。

せ 前腕の真ん中に支点があるように

バックハンドショットを放つ時、手首と肘の中間が固定されているイメージをもってラケットを振るという技法。スイングの半径が短く、コンパクトで鋭い打球ができる。さすがに今はその原理を承知し、実践を試みているが、初めて教わった時は〈アーそうなんですか〉としか言いようがない状況にあった。前腕の真ん中を固定すると、ラケットは右に振るのだが、肘は竹トンボの羽のように左に動く様が面白い。

す スイングの速さより戻しの早さ

スイング時は一直線に張られた弓の弦上を走り、打球後は弓幹（ゆがら）のように丸みをもたせて戻るのがよい。直線的な往復運動では、戻すために一端スピードをゼロにしなければならず、「イチ・ニ」の呼吸になって時間と力を浪費する。一方、弓のスイングは「イチ」の一呼吸で戻し終えることができる。《戻すまでがスイング》だということ。

ん 定年後のピンポン

定年後においても、ピンポン/卓球は身心に偉大なる貢献をもたらしているという意味。スポーツができる/仲間ができる/目標ができる等々。S・ウルマンの言う「青春とは人生のある期間ではなく、心の持ち方を言う」に相応しく、希望と情熱に満たされたウェルビーイングな日々を送ることができている。青春卓球バンザイである。

引用文献

- (1) 堀田秀吾 『このことわざ、科学的に立証されているんです』 主婦と生活社 2019年 pp.72-73
- (2) 清野文男 『日本の職人ことわざ事典』 工業調査会 2001年 pp.24
- (3) 関 容子 『中村勘三郎楽屋ばなし』 文芸春秋社 1985 pp.45-46

謝辞

卓球の技術的な部分に関しては、馬場正洋先生（八王子市卓球連盟理事長）に校閲をお願いした。末筆ながら感謝の意を表したい。

月日は百代の過客 私の「奥の細道」。歩き旅

蟻川 剛

1. はじめに……………「思い立ったが吉日」

定年退職を迎えたら始めようと思っていた歩き旅ですが、待ち切れずに退職の数年前に我が家を出発しました。自動車の運転のできない私は、自分の足でどこまで行けるか、行く先々でどんな景色に出会えるか、とても楽しみでした。いくら出かけても、必ず家にもどらねばならず、その為には主に鉄道を利用しました。毎回、目標を決めると、国土地理院の二万五千分の一の地形図を見ながら道を選んで歩き、最後に鉄道の駅に着きました。そうして、歩き旅の道すじは、鉄道に沿って延びていきました。はじめのうちは日帰りでしたが、遠くに行くようになると宿泊を伴うようになりました。また、景色をスケッチして絵手紙を書いたり、拙い旅吟を句会に投句したりするのも楽しみになりました。

紀行文と言えば、松尾芭蕉の『奥の細道』です。学校で習いましたし、その後も読み直したことがありました。私の旅は気ままな旅で、先へ先へと歩き継いでいくだけです。五街道を歩き通そうとか、『奥の細道』をたどろうということは、念頭にありません。しかし、『奥の細道』に出てくる松島、平泉、最上川、大垣など、多くの土地を通っていました。忠実に芭蕉の足跡を追った訳ではありませんが、東京（江戸）から大垣までの道すじを歩いています。その道の途中で、芭蕉の足跡に重なったり、同じ視線をもったりしています。また、芭蕉以後の時代のものに、私は出会っています。

『奥の細道』を読み返すと、自分の旅を思い出すような気持ちになります。そこで、私の歩き旅のうちから東京から大垣までの道すじを取り出し、私の「奥の細道」としてまとめてみました。

2. 東京から新白河へ……………「千里の道も一歩から」

芭蕉は、江戸を立つと千住、草加と進みましたが、私は、東北地方を目指して東北本線に沿って、荒川を渡って川口、浦和、大宮へと進んで行きました。その後、どこで交差したのか、芭蕉は栃木県の日光に立ち寄りしました。「日光を見ずに、けっこうと言うな」。私は、宇都宮から日光線をたどって日光へ向かいました。

園芸用の鹿沼土とゴルフ場の多さで名高い鹿沼を過ぎると、日光例幣使街道の杉並木の道に入りました。頭上はるかな高さにまで育った杉の巨木が、両側から枝葉を伸ばし、空の大半を覆っています。芭蕉もこの道を歩いたのでしょうか。杉の木は、その頃よりも更に立派に育っているでしょう。昔は人々が往来したこの道も、今は自動車が主役です。元々歩道を設ける余地はありませんし、歩道を造ったらこの景観も台無しです。自動車が接近する度に端に寄るしかありませんが、両側の杉の根元を覆うように土が高く盛り上げられているので、まるで逃げ場の無い大きなU字溝の中を歩いているようです。歩道らしいものは並木の外側にありましたが、草がじゃまで歩きにくく、諦めて並木の内側を歩いて杉並木の景色を十分に楽しみました。いったん帰京する為に並木の切れ目を通り抜けるとすぐに並走している日光線の文挟駅^{ふばきみ}があり、帰ることができました。

文挟から再び歩き始めると、やがて右から同じような杉並木の日光街道が見事に合流しました。そこは今市でした。間もなく、街道から入った所に神社とともに二宮尊徳の墓所

があったので、行ってみました。墓は、目立った墓石もない塚で尊徳の人柄が表れているようでした。ただ、墓に向かう参道には、明かりの消えた看板、細長い扉、意味深な店名という一目で接待付飲食店とわかる店が数軒並んでいます。これらの看板に灯がつく頃、さぞかし墓の中の尊徳翁は渋い顔をしていることでしょう。芭蕉は、二宮尊徳を知ることではなく、この杉の並木道を歩いて行ったのでしょうか。

私は、今市の先の JR 日光駅まで歩いて帰京しました。日光の二社一寺や奥日光は、小学校の移動教室の引率で何度も訪れているので、ここまでとしました。ただ、芭蕉が訪れて記してある裏見の滝は、移動教室のコースに含まれず、今だにこの目で見ていないことがとても惜しまれます。

再び宇都宮から東北本線に沿って北上を続けると、那須の山々が近づき広い関東平野の北の端へやって来たという気がしてきました。那須高原駅は、新幹線の為にできた新しい駅で、その先の黒磯駅の方が歴史を感じさせます。皇室との関係もあって、駅舎の中には重厚な木製の扉が見られました。また、構内には多くの線路が並んでいて、重要な駅であったことが分かります。

黒磯駅を過ぎると、簡素な駅が続き、黒田原駅に着きました。駅舎は大きく、窓に色ガラスが使われていました。そして、駅を出て白河方面へたどる道は、ゆるやかなカーブを繰り返して不自然に思いました。実は、その道は且て東北本線の前身となる鉄道が通っていた道筋で、町から出てしばらくした所には、駅がそこにあったという案内板がありました。その後、東北本線は現在の位置に造り換えられました。

歩いている道は平坦で、車もほとんど通らず、道の片側は、ずっと先の山裾まで水田が広がっています。季節は秋で、稲が実って黄金色です。遠くでコンバインが稲刈りをしていますが、ほとんど音が聞こえず、止まっているかのようです。広い水田に豊かに実っている稲穂が午後の陽に輝いているだけの静かな風景に、「桃源郷」という言葉が浮かびます。

日が傾き、先を急いでいるうちに、いつしか県境を越えて福島県に入っていました。上り坂となって東北本線に合流し、線路に沿って道が続きます。そして、道が下り坂になる頃、日が暮れてきました。小さな駅を一つ過ぎると、次は新白河駅です。あちらこちらで明かりがつき、新白河駅の大きな明かりが近づいてきました。ただ、足下の歩道のコンクリートブロックが、街路樹の根がもぐり込んで持ち上がっている所が多く、くたびれた足には歩きにくくて仕方ありませんでした。でも、ようやく新白河駅に向かう道に入り、明るい駅舎に入ってようやく安堵しました。

新白河駅の駅舎の入口には、旅姿の人物像が立っていました。それは、おなじみの芭蕉の像でした。芭蕉の越えてきた白川の関が、私が通ってきた道よりもだいぶ東の方にある旧道です。けれども、この芭蕉像を見て、東北地方への歩き旅が始まるのだという気持ち強くしました。そして、『白川の関にかかりて旅心定まりぬ』と記した芭蕉に、大いに共感しました。

3. 新白河から平泉へ………「兵どもが夢の跡」

新白河を出ると、すぐに城下町の白河です。櫓などのある城下町を抜けた所で、阿武隈川を渡りました。ここから仙台湾へと流れ下る東北地方を代表する川ですが、まだこのあたりでは、あまり印象に残るほどの川ではありませんでした。芭蕉も『(白川の関) とかくして越え行くままに、阿武隈川を渡る』とさりげなく記しています。

福島県の中心の福島市の手前には、郡山市という大きな都市があり、その手前に須賀川市があります。その須賀川の町に入って歩いて行き、広い道路に出ました。その道路の向こう側の歩道を走っている、大柄の陸上競技選手の姿が目に入りました。白い競技用のユニホームが目を引きました。その選手は、走っている姿のままのパネルのような像でした。そのユニホームは赤く太い斜めの線が入っている、懐かしい1964年の東京オリンピックの日本選手の着ていたものでした。そして、その選手の顔も、マラソンで第三位となった円谷幸吉選手であることを思い出しました。円谷選手は、須賀川出身でした。今でも故郷の道を走っています。

芭蕉は、この須賀川で^{とうきゅう}等躬という人物を訪ねて四、五日留まり、『奥の田植えうた』や『軒の栗』の句を残しています。その庵ものぞいてみました。

まさかと思いましたが、特撮で名高い円谷英二監督も須賀川出身です。

福島県を縦断してきた旅に並走してきた東北本線は、宮城県の岩沼で常磐線と接続します。旅をしていたのは東北大震災から間もない頃で、まだ常磐線は不通でした。陸橋を渡る時に眺めると、線路は無事でも走って来る列車は見えず、静かなままでした。また、仙台市の中心部に入る名取川（広瀬川）の手前の線路沿いの細長い土地には、仮設住宅が建てられていました。後日、その場所は再開発の土地となりました。

さて、芭蕉は、名取川を渡ると、仙台の宮城野と呼ばれる地域に入ってきました。そこで、薬師堂などを参拝しています。この薬師堂というのは、伊達政宗が、陸奥国分寺の講堂の上に再建したものだと、最近の調査で解明されています。陸奥国分寺跡（前号参照）を訪れて、ようやく私も芭蕉と同じ場所に立ったという実感が湧いてきました。

芭蕉は、その次に多賀城の壺の^{いしづみ}碑を訪れました。古い石碑がお堂の中に守られています。お堂の外から見たものでは、その碑文は明らかではありませんが、芭蕉はその碑文を書き写し、『千歳の^{かたみ}記念…行脚の一徳、存命の悦び』というように感激した様を記しています。近年、この碑の近くの高みに建物群が発掘調査され、多賀城の全容が明らかになりました。しかし、それよりも、古い石碑を感激してながめている姿が、芭蕉にはふさわしいと思います。

芭蕉は、その後塩釜で塩釜神社に詣で、船で松島へ渡りました。私が塩釜を訪ねた時は、まだ大震災の津波の被害を受けた本塩釜駅が修理中でした。駅の建物が津波をかぶるといってではなく、足元のあたりを修理していました。津波で水位の上がった海水が、駅周辺の町に押し寄せ、駅の近くにあった小さな市場も被害を受けました。

歩き旅の私は、陸路で本塩釜から松島まで行きました。道すがら海岸線が入り込んでいるので、海が近づいたり遠のいたり、木の間がくれに海に浮かぶ小島も見られました。しかし、芭蕉が見事に書き起こしたような、様々な姿を見せる美しい島々は、やはり舟から眺めるのに越したことはありません。それでも無事に松島海岸に到着しました。

松島を楽しんだ芭蕉は、石巻へ進みます。松島湾づたいに進むと当然そこに至ります。現代の東北本線は、松島海岸からまっすぐ北上します。私は、女川へ向かう石巻線の旅の途中に、石巻を訪れました。石巻の近くに漫画家のI氏の出身地があり、商店街のあちこちに漫画に登場するキャラクターの原色のフィギュアが立てられていました。そして、駅の近くの市役所の入口には、代表作の仮面ライダーが立てられ、来客を元気づけるように迎えています。もし、芭蕉が見たら、どんな感想をもったでしょうか。

芭蕉は、気を取り直して、石巻から北に向きを変えて、平泉を目指します。そして、その途中に沼地を見えています。私も岩手県に近づくと、沼の多い地域を通りました。中には、伊豆沼という、渡り鳥の飛来地として名のある沼もありました。ただし、季節外れの時に通ったので、野鳥はほとんど見られませんでした。でも、芭蕉の記述している風景と似ているように思います。

私は、一ノ関から平泉へ行き、中尊寺や毛越寺などを見てから、高館へ行きました。芭蕉は、平泉に来るとすぐに、源義経の館で最後の地となった高館に来ています。階段を登り切って、丘の上部に上り、北の方向に展望の開けている場所に立ちました。北上川に流れ込む衣川が、東西に流れているのが見えます。その先には、はるか彼方まで果てしなく大地が続いています。芭蕉はここで、『夏草や…』の句を作りました。芭蕉もこの地に立って、この風景を見たかと思うと、私も芭蕉と同じ視線をもったのだという強い感情が湧いてきました。

4. 平泉から象潟へ……………「窮すれば通ず」「けがの功名」

芭蕉は、平泉から西へと転針し、尿前の関を越えて出羽の国の尾花沢へ達しました。しかし、その道のりには、たいへん難渋しました。私も何とか山形県へ入りたかったのですが、東京から出かけて、わざわざ険しい道をたどる気はせず、山形県に入れる日帰りのルートを探しました。普通に新幹線に沿って、福島から米沢へぬける道を地形図を並べて見てみましたが、道は険しく鉄道の駅をたどるのも難しそうです。そこで見つけたのは、白石蔵王駅からバスに乗り、終点の七ヶ宿町の関まで行くルートです。そこまで行けば、峠を越えて山形新幹線の駅に出れば、日帰りで帰京できます。

バスの終点の関には、七ヶ宿町役場がありました。そこから、国道を西に向けて歩き始めました。七ヶ宿という名の通り、この道は羽州街道と呼ばれた古くからの道で、弘前や秋田の大名などが、参勤交代で利用した主要な道でした。途中の滑津^{なめつ}には、大きな茅葺の屋根の本陣がありました。若き吉田松陰は、東北地方遊学の後半に、この滑津の宿に泊まりました。道はやがて次第に人家を離れ、上り坂となって水芭蕉の群生地^{すみすぢ}の脇を通り、二井宿峠を越えました。下り坂になって、赤湯駅方面と高畠駅方面へと分かれる分岐点に差しかかり、残り時間を考えて高畠駅を目指しました。高畠の町に入り、高畠駅に着くと、真っ赤な鬼の像が迎えてくれました。ここは、物語の『泣いた赤鬼』の作者、浜田広介の出身地でした。また、高畠駅には隣接して温泉施設があり、駅舎の中で、入浴の仕度をした人に何人も会いました。

後日、バスで関を再訪し、逆方向へと歩きました。関の下流には、七ヶ宿湖というダム湖があり、旧街道と宿場の一部は、水の底に沈みました。ダム湖を過ぎると、旧街道を通り、古い集落をぬけ、峠を越えて福島の中通りへと下りました。そして、奥州街道に合流しました。そこには、桑折^{こおり}の追分が今でも残っています。こうして、東京から続いている私の歩き旅の道は、羽州街道を通して山形県へとつながりました。

高畠駅からやって来た赤湯駅には、高畠より多くの温泉宿や関連した店が見られました。そうした町を抜けると、上り坂となり、高い所から南の方の展望が大きく開けました。そこは、山に囲まれた豊かな平地が広がっています。山形県は、置賜、村上、最上、庄内という四つの地方に分かれています。この付近で高地によって区切られ、ここから南の方が置賜地方であることが、地形的によくわかる風景でした。目の前に広がる盆地の南の奥に

は、置賜地方の中心地である米沢があります。

さて、山形県に入った芭蕉は、尾花沢から立石寺まで南下し、『蟬の声』の句を作って折り返すようにまた北上します。山形県内を北上して来た私とは、天童のあたりで合流したでしょうか。更に進んで大石田の町へ入ると、酒蔵など大きな建物が見られ、古くからの町らしい風景になってきました。ただ、主要道路が拡幅工事中で、町の様子が変化しないか心配しました。そして、この町の近くで、ようやく最上川を見ることができました。最上川といえば、山形県を貫いて流れていますが、歩いて来た鉄道より西に離れていて、見ることはできませんでした。山形市の秋の大芋煮会の行われる河原は、最上川でなくその支流の馬見ヶ崎川の河原です。大石田で初めて出会った最上川は、瀬のような岩は見えず、水深が十分にあるような濃い色の流れで、その豊かな水量の川が止まることを知らぬように静かに流れ続けていました。

芭蕉が最上川を下るために乗船したのは、本合^{もとあいかい}海という地点で、現代の観光舟下りの乗船地の古口よりだいぶ上流で、大石田に近い所になっています。現代の舟下りでは、最上峡の景勝を眺め、最上川舟唄を聴けばもう十分で、芭蕉よりずっと短縮されたコースになっています。本合海へは、新庄駅の次の^{ますがた}升形駅から川の方へ歩き、最後は案内標識を頼りに進みました。史跡となっている芭蕉の乗船の地には、川面を見下ろす少し高い所に、芭蕉とそれに従う曾良の二人の像が建てられています。川は、その地点で西へと大きく方向を変え、流れもゆるやかに見えました。

芭蕉は舟に乗り、私は川沿いの鉄道を並走する道を歩きました。最上峡というように、山裾が川にそのまま入っていくような険しい所が多くありました。昔は川沿いに立派な道はなく、舟運に頼るしかありません。現代の道路も、川沿いの険しい所を通っていて、トンネルではないものの、頭上から川の方へ覆いのあるシェルターの所も何カ所かありました。歩きながら川の方を見ると、山の木々が水面に届くほど茂っている風景を背景にして、観光客を乗せた下り舟が時々追い越して行きます。対岸には、芭蕉が記した白糸の滝や仙人堂も見ることができました。何より、舟に乗っていない私ですが、川下りの船を見ながら、舟に乗っている芭蕉の気分になり、芭蕉といっしょに旅をしているという気持ちがいちばん強くなったのは、この最上川沿いを歩いている時でした。

芭蕉は、現代の舟下りコースの終着点草薙温泉より、更に下流の庄内町清川で舟を下りました。私も草薙温泉のちょっとさみしいホテルの前を通り過ぎました。迫っていた山が少し後退して、徐々に辺りが開けてきました。清川という地名が心に引っかかっていると、道に面して清河神社という神社があり、そこに清河八郎記念館がありました。やはり、ここは幕末の志士清河八郎の出身地でした。

記念館に入ると、入館者は私だけでした。すると、楚楚とした若い女性館員がやって来て説明をしてくれました。第一声は、「古来の大人物にならって、川を河に変えて清河八郎と名乗りました」（本名は齋藤正明）ということでした。あの幕末の京都で名高い新選組の母体となる浪士組をまとめたのが清河八郎で、新選組を語る時に、清河八郎を抜きにすることはできません。記念館内の見学を終えて退出する時、「ちなみに、この神社では何を祈願するのですか」と質問すると、「学業です」という無難な答えが返ってきました。

記念館を出てすぐの学校の敷地のような所に、清川の川番所で舟を下りた芭蕉下船の地として、芭蕉の像が立っていました。それは芭蕉一人の像で、本合海の乗船の地の像が二

人だったことを思い出し、同行者の曾良を最上川に落として来てしまったのかと、一人笑いをしてしまいました。

清川駅を過ぎて線路沿いに余目駅に来る頃には、最上川は広い庄内平野に吸い込まれたかのように見失ってしまいました。そして、鳥海山の秀麗な姿が大きくなってきました。秋の季節で山裾の緑、中腹の黄葉、山頂付近の岩場の茶色という色のグラデーションが、美しい山容に映えていました。芭蕉は舟を下りると、出羽三山の登頂参拝を果たしました。

余目駅は、北の酒田駅と南の鶴岡駅とに向かう分岐点に当たります。象潟へ向かうために北へと進みましたが、遠まわりになる酒田駅をショートカットして、遊佐駅へ直進して更に福浦駅へ進みました。鳥海山の山裾が海へと伸びて来ているので、福浦付近まで来ると海岸近くの道となりました。鳥海山をまわり込むと、いよいよ象潟が近づいて来ました。

象潟が近づくと、「芭蕉が歩いた頃の道」という看板が、疎林の中の細い道を指している所もありました。また、見上げるような看板に「東の松島、西の象潟」と大きな文字で書かれているものもありました。『奥の細道』を意識したものに違いありません。歩きながら、もし象潟駅の案内所で「どちらから来ましたか」と聞かれたら、東京からではなく「江戸から歩いて来ました」と答えようかと妄想していましたが、不発に終わりました。

象潟の案内所で教えられたように、近くの道の駅に行き、その中のエレベーターで展望室に上がりました。芭蕉が訪れた頃は、海の入りこんだ湾内に多くの島が浮かぶ松島に似た絶景で、芭蕉は舟に乗って島めぐりを楽しみました。しかし、その後の地震による土地の隆起で、今では且て海に浮んでいた島は、水田の中でこんもりとした樹々をのせた陸上の小島になっています。それでも、展望室から眺めると、松島のようにたくさんの島が浮かんでいる風景を想像することができました。そして、背後には鳥海山も見えました。

上空からの展望を楽しんだ後、芭蕉の立ち寄った寺を訪れ、更に水田の間の道を通って幾つかの島を巡ってから、私は象潟を後にして北へと進みました。

5. 象潟から大垣へ……………「帰心矢の如し」

松島と象潟という旅の二大目的地を訪れた芭蕉は、日本海沿いの道を通って、結びの地の大垣へ向かいました。実は、私は芭蕉のたどった道を逆行して歩いています。大垣から西へと旅をした後、途中の米原から北陸への旅に踏み出しました。そして、ずっと日本海側を通って、余目駅まで歩き抜きました。逆行しているとはいえ、『奥の細道』の記述をたどることはできます。

芭蕉は越後を歩き、親不知の難所を越えて、市振の宿に着きました。私は、西からやって来ました。市振に入っても、普通の民家が並んでいるだけでしたが、駐車場のような空いたスペースに、案内板が立っていました。それによると、芭蕉の泊まった宿屋は、すでに消失しているとのことでした。最後に、その時に作った句が書かれていました。『一家に遊女も寝たり萩と月』私の好きな一句です。そこを過ぎて市振の集落の東の出口に来ました。東から来ると市振の入口になります。そこには、すき間のあいている木の柵と簡単な門が作られていて、松の木も二本植えられていました。東の方からやって来ると、時代劇の宿場の入口のセットのように見えました。しかし、その頃の私の心持ちは穏やかではありません。行く手には、越えねばならない親不知の難所があり、その入口ともいえるべき国道の最初のトンネルが、黒い口を開けて待っていたからです。

富山湾に沿って東へと歩いている頃のこと、海から少し離れた草の多い道のほとりに、

芭蕉の句碑がありました。『早稲の香や分け入る右は有磯海』逆行している私にとっては、海は左に見えました。「夏の雲空より青き富山湾」（剛）

福井市内では、左内町を訪ねました。その町には、安政の大獄で命を落とした橋本左内と両親が葬られている、左内公園があります。左内の墓所の前には、幾つかの石碑が建てられていました。その中の一つに、彼の著した『啓発録』の内の五訓を彫ったものがありました。その大きめの文字を読みながら人柄を偲んだ後、公園の中を歩いて行きました。すると、芭蕉が訪ねた^{とうきい}等裁の家の案内板がありました。十年来の知人を訪れた時にはあいにく不在で、『奥の細道』には、留守居の家人と芭蕉とのやりとりが書かれています。その後、等裁と再会を果たしました。しかし、この案内板だけでは、どこにどのような家があったかは、定かではありません。

福井には、橋本左内だけではなく、幕末には松平春嶽、坂本龍馬に賞賛され明治になっても活躍した由利公正（三岡八郎）もいました。逆上れば、柴田勝家とお市、三人の娘の物語のある北ノ庄の城があり、古代では継体天皇のゆかりの地でした。更に、先史時代の恐竜王国など、何かと「百万石」を標榜するお隣より、悠かに多彩です。

芭蕉は、次に敦賀にやって来ました。私は、米原から北陸本線沿いにやって来ました。そして、三大松原の一つの^{けいひ}気比の松原で、歩き旅で日本海を初めて見たという思い出があります。湾の奥の白砂青松に、ゆるやかに波が打ち寄せる名勝です。ただ、心の底に何か沈んでいるような思いがしたのは、日本海だからというだけでなく、水戸天狗党の悲劇的な最期の地であったからでした。

芭蕉は、ここでは^{いろ}種の浜に舟を出して時を過し、その後一気に大垣への道を急ぎました。途中で琵琶湖や竹生島、戦跡としても賤ヶ岳や姉川、関ヶ原などがあるのですが、一文も触れていません。芭蕉にとっては、もう自分の故郷の近くの土地です。そして、何よりも、途中で別れて先行した曾良をはじめ、多くの門人に再会できる喜びで心がいっぱいだったことでしょう。

大垣の中心地から外れた静かな場所にある堀割の近くに、「奥の細道、結びの地」の碑があります。堀割の脇に立っている住吉灯台の足元の水面に、人の乗っていない一そうの和船が舳ついています。再会を果たした芭蕉と門人達は、どんな所で宴を催したのでしょうか。長途の旅の話は、尽きることがなかったのではないのでしょうか。

5. おわりに……………「国破れて山河在り」

松尾芭蕉の『奥の細道』をたどるように、私の歩き旅から取り出して、振り返るように綴ってきました。そこで感じたのは、文化の積み重なりでした。古への歌枕を訪ねて旅をした芭蕉。その芭蕉が著した『奥の細道』。芭蕉の知らないその後。そして、その先の私の旅。この文化の積み重なりは、すばらしく厚いものです。ことわざもこうした分厚い文化の中で、生まれ育ち変化してきたのではないのでしょうか。

そして、その文化を支えてきたのは、この国土です。人々の営みによって、日々変化しているように見えます。しかし、芭蕉の見た山も川も、そして海も、何も変わってはいないのではないかと、思うことがあります。（完）

<参考文献>

松尾芭蕉、頼原退蔵・能勢朝次訳注、『奥の細道』、角川書店（文庫）、1952年
時田昌瑞、『岩波ことわざ辞典』、岩波書店、2000年

屁玉と金玉 —ユニークな類諺とことわざの移ろいの様相—

時田昌瑞

執筆当初は、似たり寄ったりの類似のものがたくさんあることわざの一つを歴史的流れの観点から調べようと考えた。ところが、途中でその数が予想以上に多くなったこと、またユニークで面白い表現のものがどんどん出てきたので少し方針を変えて面白いことわざを軸にして類似ことわざの流れを追ってみることにした。

なお、本稿には筆者が収集してきた約 16 万のことわざの使用例を 3つの時代に分け英字の頭文字で示した。E：江戸時代まで M：明治時代から戦前昭和期まで S：戦後

1) 珍諺と新案喩アラカルト

珍諺とは珍しいことわざのこと。新案喩とは筆者の造語で新しく案出された比喻を指す。筆者のことわざ使用例リストに 1~2 件のものと大辞典のみ収載のことわざを対象にした。

二つのものに大きな違いがあることの代表的なことわざには「月とすっぽん」がある。それに類似するものは何と 80 以上もある。本稿ではこれをテーマとする。なお、副題にある類諺とは類似の意味やそうした言い回しのことわざ類を指すものとする。

以下、内容を幾つかに分類したうえで、筆者の独断と偏見を以てランダムにみてみたい。

人体や人間に関わるもの

○**屁玉と金玉ほど違う**：屁玉とは、おならが玉のような状態のもので目には見えない。見えるものとしては風呂の中で放屁して水面に浮上する水泡だろう。金玉は男の睾丸なので両者はまったく異なる存在になる。似た所は「玉」とそれぞれの場所が近いことだけ。この言い回しは戦後の有名な小説家・井上ひさし『戯作者銘々伝』1979 年にある。該当箇所を引用する。『『相四郎に机だなんて、猫に小判というものだよ』と、お袋は傍でにやにやしていやがったな。『甚太郎はそこへ行くと相四郎とは大ちがいだ、頭がいい。なにしろ十歳で孟子の写本を仕上げてしまったぐらいだものね。机というものはね、そうした子にしか必要がないんだよ』。甚太郎ってのは兄貴の幼名だが、とにかく実の子と継子ほどの差があったんだ。屁玉と金玉ほども違うんだよ』とある。奇妙奇天烈なこんな表現は辞典にもないし、聞いたことも無かった。井上による創作といえる。ことわざとしての要素を持つものなので今後継承されれば新しいことわざになるかも知れない。

○**しっぺたと頬^ほっぺたの違い**：「しっぺた」は尻の膨らんだ部分を指す方言。「し」「ほ」の一字が違うだけだが、まったく異なるもののたとえ。早くに辞典に収載したのが 1958 年の鈴木棠三『続故事ことわざ辞典』で新潟地方のものとしている。使用例は 1 件しかなく、1993 年の小説家・高橋克彦『偶人館の殺人』で、『『知った道に迷うってやつだ。まさに、しっぺたとほっぺたの違いだな』 『しっぺた？』 『お尻。言葉は似ていても、ほっぺたではまるで意味が違う。おうちとポーチさ』 少し頭が痛くなってきた。矢的とつき合うためには、脇にことわざ辞典を用意しておく必要がありそうだ』とある。この小説はことわざミステリーとでも呼べそうな珍しい小説で、7章の題が全部ことわざで仕立てられており、なかには「化け物に面^{ツラ}」（途方もないことにあう譬え）という

青森地方の珍諺もあることから作者のことわざに対する造詣の深さが窺い知れる。

ここに分類できるものには次のようなものがある。○天とうさまとケツの穴程違^{ヤドナシ}う：滑稽本『浮世くらべ』江戸後期。 ○お姫様と 乞食^{キニン}程違^{サツマイモ}う：人情本『花の志満台』第三扁巻の中 1836～38 年。 ○八百屋と 貴人^{キニン}：人情本『花暦封じ文』慶応年間（1865～67 年）。 ○地藏と閻魔：鶴屋南北『鬼若根元台』1825 年。

動物や植物に関わるもの

○伽羅^{キアラ}と薩摩芋^{サツマイモ}：伽羅は香木の一種であって日本で最も珍重された名香。形は薩摩芋に似ているものの香木の最高級品なので薩摩芋とは何もかも違う正反対な存在だ。1770 年の風来山人（平賀源内）『神霊矢口渡』（三）に「何と二人共見たか。旅やつれでもあの器量。旅籠屋のふんばり（売女の意）共とは。伽羅と 甘藷^{サツマイモ} 程違^{サツマイモ}つて美しいもんじゃないか。あんな物を抱いて寝る男めは憎い奴じやないかいやい」とでてくる。伽羅と薩摩芋が対照的な存在とみなされていた当時だが、現代はどうであろうか。薩摩芋の評価もそれ程低くは見られなくなり、伽羅も存在自体が知られなくなっているようなのでこの意味合いもピンとこないかもしれない。

○大鵬^{タイホウ}と土龍^{モグラモチ}ほどの違^{モグラモチ}い：大鵬は中国に伝わる想像上の巨鳥。土龍はモグラ。想像と実在、天空と地中、巨大と小型と 3 つの要素が対比されている。既存のことわざ辞典にはみられないもので、洒落本『跣婦人伝』1753 年に「色道の風情は磨り果て、手近くいへば、欲と嘘との二つでかためたこなた衆と、飾らず、食らぬ 此方^{コウチ}の意気かたとは、大鵬^{タイホウ}と 土龍^{モグラモチ}ほどの違^{モグラモチ}ひなり。」とでてくる。大鵬がでてくることわざには「燕雀^{エンジャク} 何ぞ大鵬の心を知らんや」が比較的知られているものの、他はほとんど知られていない。その意味では見出しのことわざは珍諺の一つとみられよう。

○天道様とスッポンほど違^{スッポン}う：天道様は太陽。この言い回しがあるのは江戸後期のことわざ集『諺苑』と『俚言集覧』の 2 点だけで用例は確認できていない。ここによく似たものがお馴染みの「月とすっぽん」なのだが、江戸時代は「お月さまとすっぽん」の言い回しが圧倒的に多い。こうした状況から、お月さまの代わりとして天道様に仕立てたのかも知れない。あるいは、式亭三馬の滑稽本『麻疹與海鹿之弁』1803 年に、○亀の子と天道さま程違^{スッポン}うとあるので、こちらの言い換えの可能性もありそうだ。

○鯨と鰯ほどの違^{フタリ}い：幕末期の山東京山の合巻『（当世男女之鏡）教草女房形気』（十六編上之巻）に「お内儀さんといへば、両人^{フタリ}の子供が母なり、おしやくさんといへば、あたりまへの 妾^{テカケ}にて、親の 妾^{テカケ}は子の為にも家来なり、母と妾とは、鯨と鰯ほどの違^{フタリ}なり」とでてくる。母親を鯨に、妾を鰯に譬えている。鯨には多くの人々への恩恵の意となる「鯨一匹捕れば七浦潤う」とのことわざがあるように大切なものであった。他方、鰯は大量にとれることもあって肥料にも使われるような下魚であった。かくの如く両者の違いは厳然たるものであった。もちろん、大きさの違いはいうまでもないが。共通するのは海に生きる生物だというだけ。なお、明治期のものに、○鯨に鰯（小説家・泉鏡花『風流線』七十八 明治 36～37 年）との言い回しがみられる。

○**龍とボウフラ**：似たところはあるものの、まったく異なるものの譬え。龍は中国では神獣であり、皇帝のシンボル。日本でも神話や伝承などさまざまな領域で随所に登場する。十二支の「タツ」は現代人にも身近で親しまれているものであるし、雲と一緒に描かれた図柄の雲龍文は古代から最も多く種々の作品や物品に施されてきた。ことわざも色々あるものの、英雄が行動を起こすと多くの者が参集する意の「龍吟ずれば雲起こる」は古くから知られる。ここの言い回しは辞典にも見られないもので著名な小説家・太宰治の『鉄面皮』1943年に「どうもあれは、趣向としても、わるい趣向だ。歴史の大人物と作者との差を千里万里も引き離さなければいけないのではなかろうか、と私はかねがね思っていたところに、兄の叱咤だ。千里万里もまだ足りなかった。白虎とてんたう虫、いや、龍とぼうふら。くらべものにも何もなりやしないのだ」とある。地上の腐った水にすむちっぽけなボウフラと天空の龍とでは確かに比べものにならない。

鉾物や物品に関わるもの

○**水晶とかき餅ほど違う**：1717年の浮世草子『(風俗) 傾性野群談』巻一に「八日市の大庄屋の娘、長浜まつりに乗物の隙よりちよつと見たは、もう日本には有まいと思ふたに、此女郎にくらべては、水晶とかき餅とほどこがふ、親仁も此うつくしいに迷ふて阿呆を尽しながら、嘘の有たけを誠らしう子に向てのてれん詞」とでてくる。形状に少し似たところがあるものの、他はまるで異なる水晶とかき餅を対比している。水晶に譬えられる娘とはどんな容姿の持ち主なのであろうか？ 美人を形容した「ビードロを逆さに釣ったよう」との言い回しが江戸時代にあって有名な浮世絵師・喜多川歌麿にはビードロを吹く女の美人画がよく知られる。ビードロとはポルトガル語でガラス。水晶はガラスに似ているので、美人の譬えになったとしても不思議ではない。かき餅は褐色なので、美形なここの娘が水晶に譬えられに違いあるまい。

○**玉と炭団ほど違う**：ここの玉は宝玉の類だろうから輝きがある。炭団は現代の家庭ではまず見かけまいが昭和20年代ころまではよく使われていた。炭団は木炭や石炭の粉末にフノリなどをまぜて丸く固めたもので真っ黒な玉の形の燃料。「炭団に目鼻」との言い回しがあり、顔の色が黒く目鼻立ちがはっきりしない人の形容で醜さの譬えとなっている。形は丸くとも宝玉とは真反対な代物だ。式亭三馬の滑稽本『忠臣蔵偏癡気論』1812年に「由良之助は判官の家老、義平は判官へ出入の町人、格式をならべ論ずる時は、玉と炭団ほどちがふ身分」とでてくる。

○**杖に^{ツエ}杉箸^{スギハシ}**：明治の文豪・尾崎紅葉の『心の闇』(七) 明治27年に「されども宇都宮の千束屋が一人娘、誰方へ縁づきたりといはれて、恥ずかしき相手へは遣りがたし。なるほど遣つたはず、もらつたはずと、どちらも引けぬやうな処をと念懸くれば、あるは提灯に釣鐘、杖に杉箸、さりとはい合しき縁無く、秋も過ぎて時雨月、」とでてくる。周知の「提灯に釣鐘」と同列に置かれているので、同様な意味の言い回しとわかる。杉材の箸に比べれば杖は何倍もの長さや太さがあって全然違うもの。この言い回しもこれまでに見られない表現であり、同じ意味で周知のことわざに続けるように使われていることから紅葉自身による新案と推定される。

○^{ツリバリ}釣針と^{カナダライ}金盥^{ツリバリ}ほど^{カナダライ}違う：日本の児童文学の草分けである巖谷小波の『三日月様』（『小波お伽百話』明治 44 年所収）に「はゝゝゝ！ 法螺^{ホウラ}も 好^イい加減にするがいゝや。三日月様と太陽様わ、釣針と 金盥^{ツリバリ} ほどちがわ。何処の鍛冶屋え持てつたつて、釣針が金盥になるもんか」とあり、三日月と太陽の関係になぞらえている。金盥は金属製のタライのことで昭和 20・30 年代ころまでは洗濯用に用いられていた。大きさも形も釣針とはまるで違う。これも、おそらく著者による新案かと推測される。

以上の他に、○**箸に紅梁**（上向きに反りのついた梁）：細く短いものに対して太く長いもの。俳諧書『毛吹草』1645 年。 ○**瓦と玉ほど違う**：大岡政談『後藤半四郎一件』江戸中期）。○**奉書に炭団**：奉書はきめの美しい純白の和紙。式亭三馬の滑稽本『麻疹與海鹿之弁』1803 年がある。

自然や天体に関わるもの

○**月と星ほどの相違**：菊池幽芳の小説『己が罪』明治 32 年、 ○**月と星との相違**：講談『木村長門守』明治期頃、 ○**富士と泥田の相違**：浮世草子『心中大鑑』1704 年、 ○**天淵**：天と淵のこと。郵便創設者・前島密『鴻爪痕』、 ○**天淵万里の差異**：政治家・尾崎行雄『政治紀行』（北海行脚）。

第2章 主要ことわざに見える流れ

本章では、主要なことわざの 7 点を取り上げて歴史的にその軌跡をたどってみたい。長いこと古代から現代に至ることわざの歴史的流れを見てくると偶然気付くことがある。その一つが時代によって使われていることわざに違いがあること、使われることわざの数に違いが見られることだ。例えば、二つのものに大きな違いがあるとの意味のことわざには、○雲泥の違い ○月とスッポン ○提灯に釣鐘 ○天地の差 ○下駄と焼き味噌 ○雪と墨などがあるので、これらを少し深くみてみることにしたい。

なお、ことわざにはいくつものバリエーションを持つものが少なくないので、それも合わせて示すことにした。煩雑で細部にかまける要素があるものの、ことわざの歴史的な実相に近づくための大事な方法だと考え試みることにした。これに関連し見出しとなることわざを＜親諺＞と定め（◎をつけた）その下にバリエーションを配置することにした。漢字にある親字をヒントに考え出した次第だ。親諺とする根拠は古くて常用度が高いものを原則としたが、便宜的であることを付け加えておきたい。

◎雲泥の違い：

色々なバリエーションがあるが、最も古い言い回しは「雲泥」。中国の古典に由来し、日本では平安時代の菅原道真による漢詩集『菅家文草』（巻二）にある。ついで鎌倉時代の日蓮『報恩抄』にも「此^{コノ}経は天子の正言なり。言^{コトバ}は 似^{ニタレ}ども、人がら雲泥なり。譬へば、濁水^{ジョクスイ}の月と 清水^{セイスイ}の月の如し」とある。軍紀物『源平盛衰記』にも 4 件みられる。江戸期に入ると使用例は 15 件と増大する。ただ、明治期になると 6 件と減少し、戦後になると消滅している。

江戸時代までの使用件数が多いのが、○**雲泥の違い**。ただ、江戸時代以前のものは確認できておらず全てが江戸期のもので、江戸期全般にわたって 31 件を数える。明治期

となると6件と大幅に減少し、47件の同義の○雲泥の差に完璧に追い抜かれる。戦後はこの動きがさらに顕著となり、65件に対してわずか4件となっている。また、明治期に○雲泥の相違がでてきて41件（福沢諭吉『通俗民権論』など）もあり、47件の○雲泥の差に続いているものの、戦後はまったく見られない。

ここの流れを簡略化してみると、○雲泥にはじまり、これが明治期まで続く。江戸期に、○雲泥の違い（31件）、○雲泥の相違（11件）が起こり、明治期も後者が41件と数を伸ばすものの、前者は6件と後退する。戦後となると様相はさらに一変する。江戸期に3件に過ぎなかった○雲泥の差は、明治期に47件と大きく飛躍して、さらに戦後は65件（養老孟司『からだの見方』1988年など）まで増大し、ほぼ独占状態となった。

以上までも単純な動きではないが、さらに、これに補足語を加えたものも多くあるので更に複雑になる。その代表的なものが距離を表す「万里」を加えたもので、古いものが軍紀物『太平記』にある○雲泥万里の隔てだ。また、江戸期までの使用例の多いのが、○雲泥万里の違いと ○雲泥万里。前者は戦国時代の『毛利元就の書状』を筆頭に江戸期に13件（明治期は2件、戦後は無し）、後者は江戸期に13件（明治期が11件、戦後は無し）がある。

この他にも ○天地雲泥の違い ○天地雲泥の差 ○雲泥氷炭 ○雲泥黒白の違いなどがある。特筆されるものもある。中国革命の支援者である宮崎滔天の著作には ○雲泥^{シユウ}霄壤との言い回しがある。霄は空で壤は土だから、ここの同類とみられる。これが何と7件もあるのだ。多くの人が使う表現でも一人の人物が7回使う例はありふれてはいない。宮崎以外では中江兆民が1度使っているだけだから珍しいもののなのだ。今後、使用例の収集が進めば出てくる可能性はあるが、現時点では稀有な例といえる。

以上の他にも何点かのバリエーションがあるので、本項目は多種の言い回しが多数入り混じっているとわかる。ただ、細かな点を追究するのはこの程度にして大枠で括って数値化したものを示しておきたい。使用例数はE—100、M—143、S—70となり、合計で313件。全体的に高頻度だが、特に明治期が上位の使用ランキングとなっている。

◎月とすっぽん：わずかな違いのある言い回しが沢山あるので、列記して見ることにする。但し、鼈の字をすっぽんと読ませるものは平仮名のものと同じに処理した。

使用度数の推移はE—7、M—22、S—38、このように現代に近くなるほど増えている。戦後の一例を引用する。松下幸之助『夢を育てるわが歩みし道』1989年に「当時、松下電器でつくっていたラジオは九千円前後であった。そして作業員の平均賃金は一カ月約六千円であった。つまり一カ月半働いて、やっとラジオが一台買えるわけで、まさに月とスッポンぐらいの差があった」。

○月にすっぽん：E—2、M—4、S—1、この言い回しは一貫して稀な例のようだ。

○お月様とすっぽん：江戸期は洒落本9件、噺本4件の他に11件、明治期は2件。殆どが江戸期に集中しており、なかでも洒落本での使用が目立つ。

○お月様とすっぽん程違う：鶴屋南北『隅田川花御所』1814年の他2件。M・Sは無し。

○泥亀とお月様：江戸期に9件ある。『風俗粹好伝』1825年、『娘太平記操早引』1837年など。M・Sは無し。

○すっぽんとお月さま：E—3（狂歌『狂歌五題集』1780年「一口にいはるゝことかすつぽ

んとお月様ほとよき味はなし)、M—3 (河竹黙阿弥)、Sは無し。

○すっぽんに月：E—2 (人情本『春色梅ごよみ』1832年他1件)、M・Sは無し。

○すっぽんとお月様程違う：江戸期は1件(十返舎一九『(方言修行)金草鞋』1833年)でM・Sは無し。

明治期以降にでてきたものが、○^{ガツベツ}月^{ガツベツ}の差あり (石橋忍月作品など3件)、○^{ガツベツ}月^{ガツベツ} (幸田露伴『蝸牛庵夜譚』明治36年他1件)だ。有名な文芸評論家・小林秀雄も『物質への情熱』昭和5年で、○月と^{スッポン}鼈の径庭という言い回しを使っている。

以上の他にも、○朱盆に月 (江戸期の評判記『鳴久者評判記』)、○月と朱盆 (明治期の落語『無学者』)などもあり、実に多様な言い回しが存在した。全体を大枠でくくったものは、E—52、M—43、S—39。少しずつ減少しているものの常用の域にある。

◎提灯に釣鐘：江戸時代の早い時期からみられる。狂歌集『吾吟我集』1649年をはじめ、狂歌集に4件、『西鶴織留』など西鶴作品に3件、洒落本に4件、人情本に5件など種々のジャンルで多用されており、江戸期の合計は47件。明治期では尾崎紅葉の作品に4件ある他に22件。戦後は4件。

○提灯と釣鐘：江戸時代は中期から幕末にかけて10件ある。明治期は7件みられるがその一つである夏目漱石『吾輩は猫である』(四)に「あの金田某なる者さ。あの某なるものの息女などを天下の秀才水島寒月の令夫人と崇め奉るのは、少々提灯と釣鐘と云ふ次第で」とでてくる。戦後は無し。

○釣鐘と提灯：明治期と戦前昭和期に各1件あるだけ。 ○釣鐘に提灯：戦後に1件。全体では、E—57、M—35、S—4

◎天地の違い：江戸期に鶴屋南北『^{ソガキョウダイオモイノハリユミ}曾我梅菊念力弦』(1818・9年)などに4件の使用例がある。明治期も3件あるものの、戦後は消えている。

○天と地の違い：比較的古い使用例としては、狂歌集『狂歌玉葉集』1787年「天と地の違ひなりけり秋風かたつて今宵そあふ女夫星」があり、この題は七夕。明治期も1件ある。

○天地の差：使用例数が最も多い。明治期から見られ始め、宗教家・内村鑑三は一人で6件も用いており、明治期全体では14件ある。戦後は4件。

○天地雲泥の違い：江戸期に1件だけ『闕疑兵庫記』1667年、本項目では最も古い例。

○天地雲泥：江戸期に2件 (『絵本更科草紙』初編1811—1821年他)、明治期も2件。

○天地の相違：明治期に落語『三夫婦』1911年 他4件のみ。 ○天と地ほどの差：戦後のみに7件 (外科医・榊原什『医の心』1972年など)。

以下、使用件数が1〜2回のものを略記する。○天と地ほどの違い：明治期に2件。

○天地雲泥の相違：絵入り小説『絵本金花談』巻十、1806年 ○天地懸隔の相違：世

事評論『世事見聞録』五の巻 江戸後期成立 ○天地雲泥の差：政治家・尾崎行雄『婦人読本』他明治期に2件 ○天地黑白の大差：田中正造書簡 1901年 ○^{ショウジョウ}霄壤

の弁別：尾崎行雄演説集「三国干涉の責任を奈何」1896年 ○霄壤の差：上野葉「新しい女のために」『青鞥』4巻9号1914年

全体を大枠でくくったものとしては、E—12 M—41 S—26 となり、明治期のものが質量とも優位になっている。

- ◎ **雪と墨**：早い例としては沢庵禅師『東海夜話』江戸初期前、近松門左衛門『亀谷物語』1683年、儒学者・貝原益軒『五常訓』1711年。多いのが狂歌集で7件を数える。この他に種々のジャンルで使われており合わせて50件ある。明治期は7件で戦後は無し。
- **雪と墨の違い**：江戸中期の文人画家・柳沢淇園『ひとりね』1724年。 ○ **雪と墨の相違**：ジャーナリスト・徳富蘇峰『時務一家言』(16) 1913年。
- **雪に炭**：曲亭馬琴『糸桜春蝶奇縁』(巻一) 1812年。 ○ **雪と炭**：山東京山『(当世男女之鏡) 教草女房形気』幕末。 ○ **雪と炭ほどの差異**：巖谷小波『春若丸』(三幕 中 [妙然道人庵の場])。 ○ **雪と炭との差別**：巖谷小波『こがね丸』(第九回)。
- ◎ **下駄と焼き味噌**：現代人で、この言い回しを知っている人はかなりの<ことわざ通>か、いろは歌留多に明るい人だろう。というのも、明治42年にいろは歌留多の語句を評釈した明治の文豪・幸田露伴が記した「東西伊呂波短歌評釈」でこの句は意味不詳とされていたからだ。上方系いろは歌留多の定番の一句なのだが。ここの焼き味噌とは羽子板のような板に味噌をつけて焼いたものを指し、これが下駄に似ていることからいう。
- 歌留多を除くと江戸中期ころから16件あるものの、明治期からはなくなっている。ただ、○ **下駄と焼き味噌ほどの違い**との言い回しが江戸期に2件ある。
- **下駄に焼き味噌**：江戸期に4件あるだけで、これ以降はない。なお、上方系のいろは歌留多には「下駄と～」 「下駄に～」の両方の言い回しがあり、合わせて35件を確認した。
- ◎ **黒白の違い**：古いのが世阿弥『至花道』に「上手は 非 と心得ながらするを、初心はこれを 是 と 見妄 (誤解) して 似 するほどに、たがひの 宛 て所、黒白 の違いなり」と記されている。江戸時代では中期から浮世草子・浄瑠璃・随筆など7件にみられるものの、明治期以降は見られない。
- **黒白の相違**：明治期に政治家・田中正造「先決問題」明治43年など2件のみ確認。
- **黒白の差**：劇作家・長谷川伸『相馬大作と津軽頼母』1944年 ○ **黒白清濁**：江戸期の三浦梅園『玄語』(小冊物部大小) 1775年のみ確認。
- **氷炭黒白の如し**：江戸後期の儒学者・大塩中斎(平八郎)の『洗心洞筭記』に2件のみ。
- **白黒氷炭**：幕末の長州藩士・吉田松陰の久保清太郎宛書簡(安政2年2月19日)。
- **氷炭の異**：江戸後期の経済学者・佐藤信淵『経済要略』下巻1822年。

以上の締めくくりを簡単に記す。第2章のことわざでは、総使用例数が313で1位の「雲泥の違い」が全時代を通して太い流れの主流となり、2位「月とすっぽん」234件、3位「提灯に釣鐘」96件が傍流となっている。79件の「天地の違い」こそ戦後にもみられるものの、江戸期で53件の「雪と墨」、「下駄と焼き味噌」24件、「黒白の違い」14件は全て戦前までで消えている。これは、さながらことわざの興亡史の一端をうかがわせる。そして、そこに歴史上の有名人物達が織りなすさまも一興だろう。第1章を主とする珍諺の類は、現代では憚るものもあるものの、よくぞ思いついたと感嘆する。「天道さまとケツの穴」「しっぺたと頬っぺた」「屁玉と金玉」、下がかりながら思わず笑ってしまう。

「振り出しに戻る…再挑戦」…大阪マラソンチャリティーランナー記

清水 泰生

2025年8月9日大阪マラソン2025チャリティーランナーの原稿を書き終わって見直しをしようと思っていたらPCに保存した文書が消えてしまった。現在、振り出しに戻ってこの文章を書いている。あーあ。

2025年3月24日開催の大阪マラソン2025を走り、私のチャリティーランナーは終わりと思っていたが、やり残したことがあって、振り出しに戻した。来年2026年大会（2026年2月20日開催）も京都大学iPS細胞研究所のチャリティーランナーで走ることにした。

話は戻って2023年2024年のころに戻る。2023年ロンドンマラソンをチャリティーランナーとして、走り終わったとき、ロンドンマラソンを手本にした大阪マラソンのチャリティーランナーはどういうものか知りたくなった。

「百聞は一見に如かず」そして次の世代の人に「目で見せて耳で聞かしてしてみせて～」が大切であることを思い出し、それで、2024年7月、大阪マラソン2025チャリティーランナーに申し込んだ。

チャリティーランナー以外の人も巻き込んで1カ月以上チャリティー活動をするのは、私が知る限りでは日本では大阪マラソンしかないようだ。東京マラソンもチャリティー活動期間がなくて、参加費と寄付金とチャリティーランナー申し込みが同時期であるようだ。それから、私は、昨年2024年12月開催の防府読売マラソンは、ふるさと納税枠でエントリーしたが、これも納税するのはランナーだけである（なお、防府読売マラソンは、12月1日に学術的な受賞をうけその授賞式のため欠場した。）

大阪マラソン2025チャリティーランナーでどこの団体のチャリティーランナーで走ろうかと思ったが、以前、山中先生をはじめ京都大学iPS細胞研究所の人たちが病で苦しんでいる人に一日も早くiPS細胞を届けようとチャリティーマラソン活動等をしていることをきき、今は亡き父が医学の研究をしていた様子、父のおもいを思い出し、大阪マラソンチャリティーランナーとして走ろうと決めた。

それと同時にチャリティーランナー、チャリティーマラソンとは何かを追及したいと思い専門（専門は言語）ではないけれども自分なりに研究をして昨年2025年10月台湾で行われた東アジアスポーツ社会学フォーラム等でチャリティーマラソンについての発表を行った。

話は少し変わるが、大阪マラソンとロンドンマラソンの違いはチャリティーの金額の違いである。大阪マラソンはチャリティーの金額は7万円に対してロンドンマラソンは34万円以上必要になる。それだけではなく、ロンドンマラソンは、大学院の試験願書顔負けの志望理由書、（研究計画書ではなく）募金集金計画書を英語で書くことが求められた。HP上に志望理由書、募金集金計画書を記入そして、ネットで送付。電話面接はなかったがメールで照会（面接？）があった。そのあと、審査があって可否の連絡が来る。一方、大阪マラソンはHP上で手続きをすれば合格で、募金計画書は提出する必要がなく、志望動機書はチャリティーランナー先の個人のHPに書くことになっている。ロンドンマラソンより敷居が低い

感じがした。

それからロンドンマラソンの（私の）場合、チャリティーランナー所属先からチャリティーランナーへの働きかけが多かった。毎週のようにチャリティーについてのメールが来た。それに対して大阪マラソンの場合、チャリティーランナー所属先から数回の手紙（税の控除の書類）と1回の練習会の案内メールだけであった（チャリティーランナーの他の団体の場合も同じようであるらしい）。ロンドンマラソンの方がチャリティーランナー制度の歴史があり、大会全体としてチャリティー活動が浸透しているからなのかもしれない。

大阪マラソン京都大学 iPS 細胞研究所チャリティーランナー練習会が 2024 年 11 月 30 日に行われ、国際会議（翌日 12 月 1 日会議主催団体主催の学術的な賞受賞）とかち合って参加できなかった。練習会で京都大学 iPS 細胞研究所のことをきくことが出来なかった。残念。

2024 年 12 月、目標額を突破しても募金活動を続けた。そして締め切り日が過ぎた。目標額より 1 万ほど多く集めることが出来た。皆さんに感謝。ありがとう。

そして年が明け、2025 年 2 月 20 日大会当日。記録を狙うレースは 3 月 15 日のソウルマラソン 2025 にしていたので、沿道の人々とチャリティーランで楽しもうと思った。大会の前日、マラソン受付会場で、チャリティーランナー専用の特別なブースで、並ばずにアスリートビブスをもらうことが出来た。一方、ロンドンマラソンは他の大会と同様一般ランナーと同じ扱い（並んでアスリートビブスをもらう）であった。そのブースでアスリートビブスをもらい、チャリティー先のブースへ行った。京都大学 iPS 細胞研究所の所長さんはいなかったが事務方の方と京都大学 iPS 細胞研究所とチャリティーランナーについて少し話をうかがうことが出来た。

そしてマラソン当日。チャリティーの更衣室、控室があって控室で朝食をいただいた。ロンドンマラソンの場合、朝食がなかったのでうれしかった。ロンドンマラソンは全ランナーの 8 割はチャリティーランナー。一方大阪マラソンは 500 人だから至れり尽くせりかもしれない。

荷物も更衣室に置くことが出来た。荷物を置いてスタート地点へは 30 分かかりトイレも少なく大変だった。事前のトイレをすることが出来ずスタート。10 キロ付近でトイレへ 4、5 分ロス。でもチャリティーが目的になるので気にしない。天気が悪く寒く雪が舞っていたので、楽しんで走るというのには程遠かった。寒い中耐えて走った。3 時間 48 分台（ネットタイム）でゴール。

そして外での荷物の受け取りもなく更衣室で着替え、控室で主催者が用意していたチャリティーランナー用の軽食を食べながら日本語教師養成講座の教え子のゴールを待った。残念なことに所長とお話しすることが出来ず残念だった。

チャリティーランナーの全体の様子等が十分に把握できないまま、私の大阪マラソンチャリティーマラソンは終わった。やり残した感があったのともっと深くチャリティーマラソンを理解したいと思い、再試験を受けるつもりで大阪マラソンチャリティーランナーとしてエントリーした。振り出しに戻る？ 今度こそは天気も良くて沿道の皆さんと大阪マラソンチャリティーランを楽しみ、共有できればと思っている。



大阪マラソン 2026 の私の募金箱（日本語教師養成講座の元修了生がイラストを描いてくださった）12月までチャリティー活動するぞ



大阪マラソン 2025 が終わってチャリティーランナー控室の前で



大阪マラソン 2025 チャリティーランナー控室



大阪マラソン 2025、大会前日、京都大学 iPS 細胞研究所のブースにて
山中先生は等身大パネル



台湾国立体育大学で開かれた東アジアスポーツ社会学フォーラムにて（チャリティーランナーについて発表した）

（備考）

次の HP に大阪マラソンチャリティーランナーのことが詳細に出ている。

・大阪マラソン 2026 <https://www.osaka-marathon.com/> （2025 年 8 月 20 日検索）

・私の大阪マラソン 2026 チャリティーランナーのコーナー

<https://osaka-marathon.syncable.biz/campaign/8191> （2025 年 8 月 20 日検索）

・大阪マラソン 2025 iPS 細胞研究所レポート（iPS 細胞研究所からは 7 名が出走）（2025 年 8 月 20 日検索）

<https://www.cira.kyoto-u.ac.jp/j/pressrelease/other/250225-170000.html>

・寄附金使用用途について

いただいたご寄附は、iPS 細胞を活用した新たな治療法を開発するため、「医療応用や革新的研究の支援」、「優秀な研究者・研究支援者の確保」、「知的財産（特許）の確保と維持」、「研究支援体制、研究環境改善の取組み、情報発信・普及活動」に大切にに使わせていただきます（<https://osaka-marathon.syncable.biz/partner#ipskikinkyoto> より。（2025 年 8 月 20 日検索）

口裂け女とレインボーマン

横田 詞輝

ことわざの多くは誰がいつ言い出したものかよくわかりません。けれど、どこかに発生源があり、表現が的確で覚えやすいものが残ったものだということは推測できます。同じ意味でも表現の異なることわざが存在するのは、伝播のなかで言葉が付け足されたり変えられたりすることで地域性や時代性が出てきたのでしょう。民話や伝説、土地に伝わる歌など昔から口頭で伝えられてきたものの中でも、ことわざはカジュアルで娯楽的な要素も含まれているように思えます。そして、流行語のように一過性のものでなく時が過ぎても語り継がれることが大切な要素だと言えます。

1970年代に「口裂け女」の怪談が流行りました。後年、まことしやかに言われたのが「発生源は日本の真ん中に位置する愛知か岐阜のあたり。大手広告代理店（または米国の情報機関）が仕掛けたもので、噂がどのように全国に拡散されるかの検証だった」という都市伝説。とはいえ、時間をかけて尾ひれが付き口伝で拡散していく経緯は興味を惹かれます。

「口裂け女」の怪談は1975年ごろに近畿地方で流れ始めました。78年12月、岐阜県美濃加茂市での目撃情報をきっかけに小中学生を中心に噂が広まり、地元の警察署や教育委員会に問い合わせが殺到。集団登下校をさせる学校やマスク姿の女性がタクシーに乗車拒否されるという事態が起きました。ちなみに78年12月は人気俳優の田宮二郎が猟銃で自死したニュースが日本列島を駆け巡ったという時代背景があります。

噂は79年1月に岐阜市から大垣市へ広がり2月には関ヶ原を越えて滋賀県に侵入。その後、京都、三重への南下ルートと長野、福井からの北陸ルートでそれぞれ拡散。2月には同時発生的に長崎市から九州全土へ広がり、警察が対応に追われるなど大きな騒ぎとなりました。さらにマスクミが報道したことにより拡散の速度も進み規模も拡大し、兵庫県姫路市では口裂け女を装い刃物を持って他人を脅したとして逮捕者（不起訴）が出ています。

「マスクを外すと口が耳元まで裂けている」「とても早く走る」「鎌を持っている」「一人説、三人説」「べっこう飴を好む」「ポマード！と叫ぶと退散する」など地域性や変化が付け加えられ、6月には北海道から沖縄まで日本全国へ広まりました。意外なのが愛知、静岡の東海地方ではあまり知られていなかったということです。また、76～79年はいわゆる花粉症によるマスク着用の人が増えはじめ、「マスク姿で人様の前に出る」という従来は憚られていたことが当たり前になってきた時期と重なっていることも付け加えておきます。※①②

さて、昭和の時代に子どもたちの間で流行った替え歌も似たような流れで広まったのではないのでしょうか。替え歌はおかしな言葉や下品な歌詞に置き換えるものが多く、地域性や伝播の方法などにより何パターンかの歌詞が存在するようです。しりとりのように歌詞の語尾に言葉を付け加えるものもありました。

♪あかりをつけましょ 爆弾に（うれしいひなまつり）

♪カラスなぜなくの カラスの勝手でしょ（七つの子）

昭和生まれの人ならば一度は聞いたことがあるはずです。

♪森とんかつ 泉にんにく かーこんにゃく まれてんぷら（ブルー・シャトウ）

♪瀬戸わんたん 日暮れてどん ゆうなみなみそしる（瀬戸の花嫁）

しりとり之歌は末尾に食べものをつなげていく「言葉遊び」が多かったように思います。

72年10月から73年9月までNET系で放映された特撮テレビ番組『愛の戦士レインボーマン』の主題歌「行けレインボーマン」の替え歌が子どもたちの間で流行りました。

元歌は ♪インドの山奥で修行して

作詞者は「月光仮面」の原作者でもある川内康範。歌手の森進一が川内の書いた「おふくろさん」の歌詞にアレンジを加えたことに激怒したエピソードがありますが、子どもたちはその川内の歌詞を勝手にアレンジして歌っていたことになります。

インターネットにはレインボーマンの替え歌を検証した複数のサイトが存在します。それらによると

♪インドの山奥でんでんかたつむり

♪インドの山奥でっ歯のハゲあたま

♪インドの山奥でんでん六豆

の3系統に分類されるようです。首都圏で流行し近畿地方ではそれほど知られていないとのことですが、番組の放映当時は小学3年生で大阪府高槻市（大阪と京都の間）に住んでいた私は、

♪インドの山奥でんでんかたつむりんごの気持ちはよくわかる

の替え歌を知っていました（りんご～以降の歌詞は並木路子「りんごの唄」（45年）と思われる）。

「でん六」は山形県に所在地を置く大正13年（24年）創業の豆菓子屋で、でん六バージョンが関西ではあまり馴染みがないのはそういったこともあるのでしょう。※③④

噂話や替え歌は小中学生に親和性があります。1970年代の子どもの情報源はテレビとラジオ、漫画雑誌くらいでした。「口裂け女」の噂が新潟県内で猛威を振るったのは関西地方に修学旅行に行った子どもが持ち込んだのが一説とされています（まるで変容しながら拡散していった新型コロナウイルスのようです）。学校という閉じたネットワークで生成される噂には原因や時期、流布の仕方に様々な要因があり、資料として残されたものには内容や時間にズレが生じます。

替え歌や物語のひとつを取っても現代ではSNSの普及や著作権問題などの影響は切り離せません。創作された言葉はすぐに拡散しますが、逆に苦情が殺到したり著作権を主張したりするものが現れて拡散が止まることもあります。言葉はこれから、時代の影響をどのように受けていくのでしょうか。

（敬称略）

※【参考文献】

- ① 室生忠／「路上 街角の怪」／『都市妖怪物語』／三一書房／1989年／pp. 49-64
- ② 初見健一／「口裂け女」騒動／『ぼくらの昭和オカルト大百科』／大空ポケット文庫／2012年／pp. 286-309
- ③ 大槻ケンヂ／「愛の戦士レインボーマン 日本全国に響き渡る「インドの山奥で…」の替え歌」／『東京人』／都市出版株式会社／2016年8月号／p. 86
- ④ レインボーマン「インドの山奥」の替え歌を本気で調べてみた/にやにやにや工務店の事件簿/2020-03-20/https://junemutsumi.hatenablog.com/

「じゃ」か「へび」か？

藤城 孝輔

沖縄を舞台にした現存する最古の劇映画は、1932年の『執念の毒蛇』とされている。ハワイ移民として財を成した沖縄出身の渡口政善が本土の吉野二郎を監督に招き、みずからも製作、脚本、主演までこなした無声映画である。四谷怪談を下敷きにした、妻の亡霊による不埒な夫への復讐譚が、ハワイと沖縄を舞台に展開される。

ただ、この映画はタイトルをどう読むべきなのか、今日にいたるまではっきりしていない。戦前の作品であるため映画完成当時の資料がほとんど残っておらず、タイトルにルビのついた文献がまだ発見されていないためだ。そのため、「しゅうねんのどくじゃ」と「しゅうねんのどくへび」の二通りの読みが考えられる。日本映画研究者のアーロン・ジェローは英語の論考のなかで *Shūnen no dokuhebi* というローマ字表記で本作を紹介しているが、「どくへび」の読みの根拠となる資料は示されていない (p. 276)。一方、英語圏の大手映画ウェブサイト Letterboxd では *Shūnen no dokuja* と明記されているが、もちろんこちらでも読みの根拠は説明されていない (“*The Vindictive Snake*”)。

当然ながら「どくじゃ」も「どくへび」も一般的な表現である。手もとにある『新明解国語辞典』（語義の説明にときどきクセがあるが、面白く読める辞書だ）を引くと、「どくじゃ」は「牙（キバ）に毒液を分泌する腺（セン）を持つへび。コブラ・ハブ・マムシなど」(p. 1062) として出てくる。「どくへび」のほうは独立した項目こそ立てられていないものの、「へび」の定義のなかで、「青大将・マムシ・コブラなど、管状で、ひよる長い爬虫（ハチュウ）類の総称。足が無く、うろこでおおわれたからだをくねらせて進む。「毒—」」(p. 1347) と、用例として「どくへび」が登場する。映画のなかには猛毒をもつ沖縄の大型の蛇であるハブが登場するが、だからといって「どくじゃ」だけを「毒蛇」の正しい読みとすることは不可能である。

しかし「じゃ」と「へび」は、単なる漢字の音読みと訓読みの違いではなく、異なる意味を表す場合もある。再び『新明解国語辞典』を引くと、「じゃ」の項目には「(大きな)へび。【—の道はへび】同類の(悪)者は互いにその社会の事情に通じている」(p. 655) とあり、ただのへびではなく大きなへびを含意していることがわかる。用例として挙げられていることわざ「蛇の道は蛇」では「じゃ」と「へび」の二種類の読みが使われている。「じゃ」が大蛇を指す一方、ここでの「へび」は小物を意味するだろう。本号掲載の時田昌瑞氏による干支ことわざの解説にある室町時代の類義表現「蛇の道をば小さけれ共蛇^{くちなわ}が知る」では、はっきりと「くちなわ」（へびを指す婉曲表現）の小ささに言及している (p. 2)。映画監督の黒沢清は「蛇の道は蛇」をもじって『蛇の道』というタイトルの映画を撮ったが、娘を殺されて一人でヤクザの組織に復讐しようとする主人公の寄る辺なさを強調するために、あえて「じゃ」よりも卑小な存在を暗示する「へび」と読ませている。

「蛇は寸にして人を呑む」ということわざに登場する「蛇」も、「じゃ」と読んだほうがしっくりくる。のちのち大きく成長する「じゃ」は幼いころから人を呑み込む素質を発揮するという意味だからだ。大きくならない小型の「へび」であれば、そもそも人を呑もう

とはしないはずだ。

2024年から時田氏と共著で続けている『毎日小学生新聞』の連載のなかでこのことわざの異形「蛇は一寸にして人をのむ」をとりあげたさい、「蛇」の読みが問題になった。この連載では、新聞社の表記や表現のルールに則り、私たち著者の書いた原稿を編集部の人間が修正したうえで掲載している。小学生を読者層に想定しているため総ルビをつけるというのも編集部の方針だ。「蛇は一寸にして人をのむ」の原稿に編集部が「へび」とルビを振って返してきたとき、私も時田氏も校正の時点で気づくことができなかった。もちろん私たちはすみずみまで目を皿にして確認するように努めてはいるのだが、自分たちが書いた部分はともかく、編集部による想定していない改変まで探すのには限界があった。

紙面に出たあとになって「蛇」のルビが「へび」であることに気づき、訂正文を出すべきかどうか編集部とともに検討した。たしかにルビの振られた用例の多くは、「じゃ」を読みとしている。だが、ルビが振られている用例はほんの一部でしかない。大半のルビなしの用例は、実際にどう読まれていたのか確かめようがない。まさに『執念の毒蛇』のタイトルの読みの問題の再来である。「じゃ」が意味的によりふさわしい読みであろうことは間違いないが、「じゃ」のみを正しい読みとして「へび」の読みを間違いと断言するには根拠が乏しかった。

新聞社の校閲部が調べたところ、現在流通している一部のことわざ辞典では「へび」を「じゃ」と並ぶ正しい読みとして許容していることがわかった。旺文社の『成語林 故事ことわざ慣用句』では、「じゃ」のページに「蛇は一寸にしてその氣を得る」と「蛇は寸にして人を呑む」という項目があるのみならず (p. 508)、「へび」のページには「蛇は寸にして其の氣を現す」と「蛇は寸にして人を呑むの氣あり」の二つが項目として立てられている (p. 1026)。そのうえ、「蛇は一寸にしてその氣を得る」の定義のなかでは、「蛇」は「へび」とも読む (p. 508) と、「へび」が「じゃ」と同じく許容されるべき読み方であることが説明されている。

結局、この辞書の記述を根拠として「へび」の読みを認めたが、辞書はあくまで二次資料である。本格的に調査をするならば、過去の文献をあさって「へび」とルビの振られた用例を見つけてこななければならないだろう。一次資料による裏づけがない限り、蛇でなくとも手も足も出ないのだ。

引用文献リスト

旺文社編、尾上兼英監修『成語林 故事ことわざ慣用句』旺文社、1992年。

時田昌瑞「干支のことわざ—蛇—」『コトワザあらかると』9号、2025年、p. 2。

山田忠雄／柴田武／酒井憲二／倉持保男／山田明雄編『新明解国語辞典』6版、三省堂、2005年。

Gerow, Aaron. "From the National Gaze to Multiple Gazes: Representations of Okinawa in Recent Japanese Cinema." *Islands of Discontent: Okinawan Responses to Japanese and American Power*, edited by Laura Hein and Mark Selden, Rowman & Littlefield, 2003, pp. 273-307.

"The Vindictive Snake." *Letterboxd*, <https://letterboxd.com/film/the-vindictive-snake/details/>. Accessed 25 Sept. 2025.

＜人の振り見て我が振り直す＞とライトの点灯

小森 英明

2019年の春に、東京から自らの結婚と母の介護の都合でこちら故郷の三重に移って、早いもので足掛け7年目に入ります。そうした中、夕刻以降にハンドルを握っている最中に、車のライト（車幅灯も含める）の点灯が、東京などと比べて三重は若干遅いのではないかと疑っていました。相当暗くなっても、ライトを点灯させない車が多いのです。

それで、少し古いデータですが（2023年）、人口10万人あたりの交通事故死者の数は、我が三重県では不名誉なワースト2位となっています。識者はそうなった原因をいろいろと並べていますが、私はこのようなライト点灯の遅さが起因しているのではないかと、とも考えています。

自動車学校では、夕刻に至ってライトを点灯させる理由の一つとして、「こちらにも走っている車がいる」存在自体を強調するためと習いました。してみると、夕刻に早目にライトを点灯させるべき理由がちゃんとある訳です。そう思って、こちらがライトを点灯させても、それを見て「自分も点灯しなければ…」と思い至るドライバーは、（特に三重県では）残念ながら少ないのではないかと思います。

仕事が終わりと、家路へと急ぐひと時、リラックスしたい気持ちはわかりますが、そんな時にこそ、むしろハンドルを握る上で用心する必要がある様です。昔から「たそがれ時」とはよく言ったものですが、それは正にライトを点灯する時間帯でもあります。

ところで、こうした心理を見事に突いた諺として、＜人の振り見て我が振り直す（直せ）＞という恰好の用例があります。時田昌瑞氏が著した『岩波ことわざ辞典』（岩波書店、2000年）によれば、その意味として、「他人の行動の良い悪いを見て、自分の行いを振り返り、改める材料にすること」（同書508頁）と述べられています。

ただ、この諺を見る限りでは、一昔前までの日本人が重んじた「他人本位主義」、あるいは「アジア」的な「価値相対主義」などとの批判（非難）が聞こえてきそうです。

しかし、実際に事故に遭うのは飽くまでも自分であって、この意味で、逆説的ではありませんが、自ずとそれは「自分本位主義」になります。そればかりか、諺を単なるスローガンとせず、良い形での「自分本位」に全ての意味と意義を読み替える時（「利己主義」にも非ず）、諺は本当にその魅力・威力を存分に発揮するものと思われまふ。

そして、このような状況を、差し詰め、禅の言葉に言い直すと、「誰かという時は自分一人であるかの如く、自分一人である時は誰かというかの如く振る舞え」（出典不明）という味わい深いものになります。…いかがですか？

これを見てもわかるように、それは「他者」あつての「自己」であつて（自分一人である時は誰かというかの如く…）、決して「自己」のみが突出したものではありません。そんな独りよがりの「自己」といったものを、禅は推奨しません。

しかし、一方で禅は西洋の「実存主義」などと対比されるべく、飽くまで「個」というものを大切にする思想です（誰かという時は自分一人であるかの如く…）。

よくドライバーが車内の同乗者をエンターテインしようとしてしまい、必然的に運転が疎かになったり、夕刻になったりしてもライトの点灯をつけ忘れたりする場合に、私として

はその当事者に対して、この＜人の振り見て我が振り直す（直せ）＞の諺と禅のこの言葉の両方を、そっと贈りたいものです。

結局、道路とは‘他者’との共存を図るところです。その意味で、倫理観や道德観の胚胎する源泉とも言えます。ところが、車とは‘移動する（音楽付きの）個室空間’のイメージが強く働き過ぎてしまい、どうしても前述のような具合となってしまうのでしょう。

ところで、もし車のライトの点灯が問題視された場合に、‘常識’（バランスの取れた判断力を重視）をとるか、‘立法化（条例化）’（例えば、「夏期は〇時以降にライトを点灯する」と交通法規で謳うこと）をとるか等、いろいろと対策の方法があります。

概して、日本では先に‘立法化（条例化）’をはかり、それに漏れた場合に‘常識’に訴えと言った手段が常套化しています。ところが、欧米では、まず先に‘常識’へと訴え、それでも奏功しない場合に、初めて‘立法化’を行うというケースが少なくありません（なお、ここで言う‘常識’とは、元来、仏教由来の言葉であって、文字通りに「バランスの取れた〔常〕判断力〔識〕」を意味しており、現代語の如き「一般的な知識の総体」としての意味〔例：「常識が無い」等〕には用いてはおりません）。

…果たして、この場合に、一体どちらの方が適正なのでしょう？

最初に‘立法化（条例化）’ありきの場合、それなりの強制力はもちろんありますが、＜人の振り見て我が振り直す（直せ）＞といった諺等は単なる公共のスローガンに成り下がってしまう場合が多いように思われます。

これに比して、先ず‘常識’すなわちバランスの取れた判断力に訴える場合、強制力は前者ほど見込めませんが、先に述べたように、こうした諺が或いは自分本位主義に則ったものと見なされて、延いては自己のものとして血肉化される可能性が高まります。

確かに、ただでさえ被暗示性の高い三重県人の県民性（概ね「右に倣え！」の県民気質）を重んずるならば、もちろん最初に‘立法化（条例化）’ありきの場合が挙げられると思います。恐らく、夕刻以降の自動車事故は激減するでしょう。

しかし、それでも私個人の意見としては、（日本では穏健派と言われる）第一義としての‘常識’に、敢えて訴えたく思います。

先に、道路とは‘他者’との共存を図るところである、と述べました。それならば、他者に向けての想像力が常々、大いに働いている必要があります。この場合、想像力とは「こちらの思いが相手の言行を予め包むこと」にあります。そのことは常識（バランスの取れた判断力）の重要な部分を占めるものと呼んでも、差し支えないものと考えます。

そして、このような相手のことをそれなりに慮る想像力、その想像力が働かなくなったら（枯渇化したら）、もう運転免許証を自ずと返上すべき時かもしれません。もはや、他者との共存が図れなくなっているからです。自動車事故ということを念頭に置けば、逆走の問題等は、他者との共存が図れなくなった証左だと言えます。加えて、この場合には、本人の‘常識’そのものが、周囲に対して通用しなくなっているとも考えられます。

こうした意味でも、やはり、私は先ず以て‘常識’に訴えたく思います。

しかしながら、このような事柄は、すべて本人の自覚に俟つ処が総じて大きいと思います。その自覚の向かう先に、当然‘他者’が自ずと含まれる点で、車のライトの点灯一つにとっても、このように実にややこしい問題と成り得ます。この錯綜する問題を少しでも解明すべく、私たちは諺と共に、今後とも粘り強く考え続けて行く必要があります。

【執筆者紹介（五十音順）】

① 氏名 ② 出身地 ③ 所属

① 蟻川 剛 ② 東京都出身
③ 日本ことわざ文化学会理事

① 小森 英明 ② 三重県出身
③ 武蔵野大学仏教文化研究所客員研究員、日本笑い学会三重支部運営委員

① 清水 泰生 ② 和歌山県出身
③ 同志社大学嘱託講師、日本ことわざ文化学会理事

① 時田 昌瑞 ② 千葉県出身
③ ことわざ・いろはカルタ研究家、日本ことわざ文化学会副会長

① 林 幸子 ② 神奈川県出身
③ 元埼玉県立大学准教授

① 藤城 孝輔 ② 沖縄県出身
③ 広島大学准教授、日本ことわざ文化学会理事

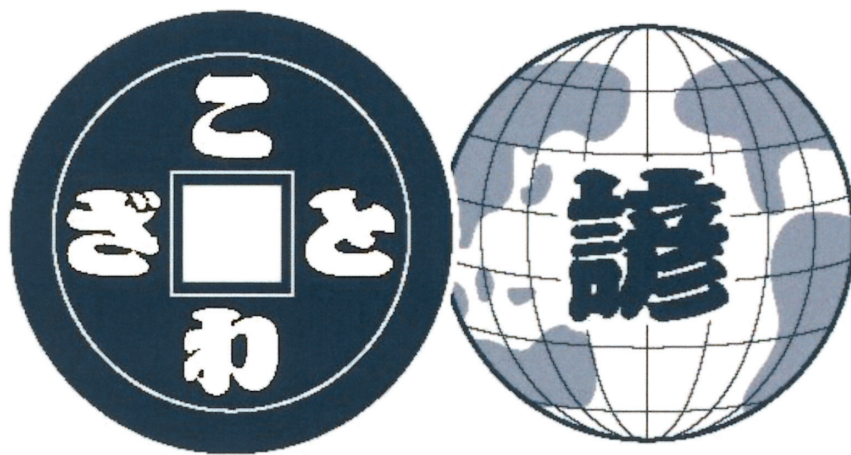
① 三木 恒治 ② 岡山県出身
③ 岡山理科大学特任教授、日本ことわざ文化学会会長

① 山口 政信 ② 徳島県出身
③ 明治大学名誉教授、日本ことわざ文化学会理事

① 横田 詞輝 ② 兵庫県出身
③ 毎日新聞客員編集委員

① 渡辺 慎介 ② 神奈川県出身
③ 横浜国立大学名誉教授、日本ことわざ文化学会副会長

日本ことわざ文化学会



ホームページ <https://www.kotowaza-bunka.org/>

『コトワザあらかると』

2025 年 11 月 20 日 第 9 号第 1 刷発行

発行者：日本ことわざ文化学会 ©

「日本ことわざ文化学会」事務局

所在地：〒700-0005 岡山市北区理大町 1-1

岡山理科大学 杉山研究室

学会 HP： <https://www.kotowaza-bunka.org/>

E-mail： paremio@gmail.com